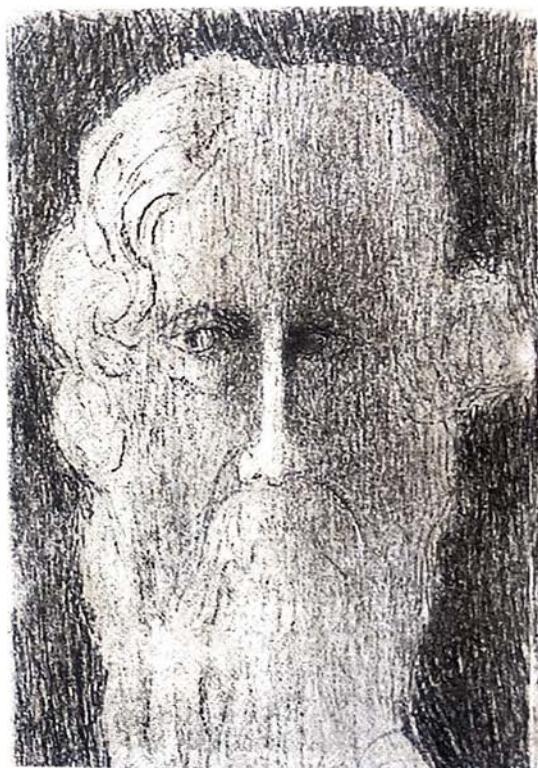


ユニテ 27

日本ロマン・ロランの友の会・創立 50 周年記念



ガンディー像 (徐悲鴻画)



タゴール自画像

財団法人 ロマン・ロラン研究所

2000. 4

TAGORE
GITANJALI

35

WHERE the mind is without fear and
the head is held high;

Where knowledge is free;

Where the world has not been broken
up into fragments by narrow domestic
walls;

Where words come out from the depth
of truth;

Where tireless striving stretches its arms
towards perfection;

Where the clear stream of reason has
not lost its way into the dreary desert sand
of dead habit;

Where the mind is led forward by thee
into ever-widening thought and action—

Into that heaven of freedom, my Father,
let my country awake.

.....

35-

Là où l'esprit est sans crainte et où la tête est haut
portée;

Là où la connaissance est libre;

Là où le monde n'a pas été morcelé entre d'étroites
parois mitoyennes;

Là où les mots émanent des profondeurs de la
sincérité;

Là où l'effort infatigué tend les bras vers la perfec-
tion;

Là où le clair courant de la raison ne s'est pas mor-
tellement égaré dans l'aride et morne désert de la
coutume;

Là où l'esprit guidé par toi s'avance dans l'élar-
gissement continu de la pensée et de l'action —

Dans ce paradis de liberté, mon Père, permets que
ma patrie s'éveille.

TRADUIT DE L'ANGLAIS
PAR ANDRÉ GIDE

タゴール ギタンジャリ 35 森本達雄 訳

心が怖れをいだかず、頭が毅然と高くたもたれているところ、
知識が自由であるところ、

世界が 狭い国家の壁で ばらばらにひき裂かれていないところ、
言葉が 真理の深みから湧き出づるところ、

たゆみない努力が 完成に向かつて 両腕をさしのべるところ、
理性の清い流れが 形骸化した因習の干からびた沙漠の砂に吸いこまれ 道を失うこと
のないところ、

心が ますますひろがりゆく思想と行動へと、おんみの手で導かれ 前進するところ

そのような自由の天国へと、父よ、わが祖国を自覚めさせたまえ。

ロマンス・ロラン研究所と自然破壊	70
ロマンス・ロラン研究所の活動・設立趣意書	76
新会員からのお便り	81
一九九九年度 賛助会員、寄付者名簿	83
友の会創立五十周年記念コンサートへのお礼——あとがきにかえて	84

ピアノとベートーヴェン

園田高弘

今年はロマン・ロラン友の会創立五十周年ということで、ここで演奏することになりました。どうして私がロマン・ロランと関わったかというのを最初にお話ししたいと思います。

昨年、私の七十歳記念演奏会の時に、みず書房の編集を昔やっておられた高橋正衛さんという方が楽屋にいられて、立ち話をしながら「実は、来年ロマン・ロランの友の会創立五十周年だが、演奏会をやってもらえないかなあ」と、ご依頼がありました。その時は、創立の時に、東京・神田の共立講堂で演奏したことをちょっと思い出せませんでした。「いいですよ」と、簡単に言っていました。あとで実はその時に私が演奏したこと、そして宮本（正清）先生もお話しになったというようなことを伺って驚愕したわけです。

その高橋さんに、今度ここでお目にかかるつもりだったので、ヨーロッパから帰ってくる飛行機のなかで新聞を見ていたら、高橋さんが亡くなられたという記事が突然目に入りまして、悲しいですが、飛行機の上でどうしようもなく驚いたわけです。心からご冥福をお祈りしたいと思っております。

五十年前と申しますと、ここにいらっしゃる方はほとんどお生まれになっていないのではないかと思います。今日、この立派なパンフレットを拝見していますと、ロマン・ロランがベートーヴェン没後百年の一九二七年に講演をされたと書いてありますが、私は一九二八年の生まれなので生れていません。やはり時というのはどんどん流れていくの

だということを感じました。それともうひとつ雄大な話しというのは、あそこでビデオをお撮りになっているのですが、あれは一〇〇周年のために、私の話を録画するのですが、私はもちろんその時には生きていないわけですから、ここにおられる方もあと五十年というのはなかなか大変ではないかと思えます。

五十年前と一口にいいますが、その頃の日本といえますのは、今考えてみても、貧しい戦中戦後の時代で、私は、ちょうど中学校から上野の音楽学校、現在の芸大ですね、それに至る頃でした。その頃はもっぱらフランスの自然主義文学というのに憧れていました、かたっぱしから乱読していました。モーパッサン、フローベール、スタンダール、デュマ、ゾラそしてアンドレ・ジイド全集などを買って読んでいました。マルタン・デュ・ガールの「チボー家の人々」とか、ラディケの「ドルジェル伯爵の舞踏会」であるとか、そういうのを漁って読んでいた時代でした。

音楽学校を卒業した頃、たまたま演奏会で前出のみず書房の高橋さんという方にお会いしました。みず書房には、その頃、みなさん、よくご存知かもしれませんが、青木やよひさんといってベートーヴェン研究の本をいろいろ書いておられる方や評論の北沢方邦さん、そういう方々がおられました。

当時ロマン・ロラン全集を刊行中で本を頂いたりして、それがきっかけで片山（敏彦）先生とか、宮本先生という名前を知ったわけです。そのロマン・ロランの「ベートーヴェン伝」というのを初めて読んで私は大変感動しました。自分が音楽をやっていますので、ベートーヴェンというのは多少は楽譜を通じて知っていましたが、初めてベートーヴェンの生涯というものを読んでほんとうに感動したのです。それから「ジャン・クリストフ」や「魅せられたる魂」という長大なロマンを読んで感銘を受けた記憶があります。ベートーヴェンの生涯というのは、ほんとうにそれまで私が、文学などを漁って読んでいたものとは全然違って、自分がほんとうに音楽をやろうと志していたこともあって、眼を開かされるものがありました。

その後、「ベートーヴェン研究」の三巻の著書によって、さらにベートーヴェンという作曲家に興味が湧いたわけ

であります。何に最も興味を湧かせたかといえますと、ベートーヴェンという音楽を文字で語ることができるのだというのでした。ロマン・ロランの文章の美しさというのは特別なもので、それに非常に緻密で、ある時は装飾的で感情的であるのだけでも、その表現というものに非常に魅了されたわけであります。

私自身のことをその時考えてみますと、その頃本当にベートーヴェンの作品を熟知していたかどうかといえますと、そうでもなかったのではないかと……。むしろロマン・ロランの文章によって、ベートーヴェンの最後の三つのソナタであるとか、ハンマークラヴィアであるとか、あるいはディアベリ変奏曲というもの、そういうものに対して何か関心が湧いてきたという感じだったと思います。

特にハンマークラヴィアのアダージョについてロランと老女マルヴィーダとの出会い、そしてマルヴィーダがそれを静かに弾いてくれたことをロランが感動して書いていますね。そういう文章に接して人間というのは、精神的な繋がりが非常に重大なのだと感じたわけです。もちろん、それによってベートーヴェンの偉大さをうかがい知ることができたわけです。ロマン・ロランを読んだことが、私にとって、ものを考えることの下地になったといっていると思います。

その頃、フランスに留学したこともあって、少し病気をし帰国しまして、カラヤンと初めて共演することになったときには、私はドイツ語をしゃべらないでフランス語でカラヤンとお話しをしたというような不思議な経過をたどっていました。

私が本当にドイツというものに目覚めたのは、ドイツへ行って、せっかくドイツに来たのだから、ドイツの精神文化、文学そして哲学、そういうものに関心を向けなければと思ひ、本を読み出した時からでした。それがドイツ化ということなのでしょう。本を読むということについては、ベートーヴェン伝もベッカーであるとか、リーツラーであるとか、セイヤーであるとか、ノールとか、そういうものを丹念に読み出して、そこで初めてロマン・ロランの偉大さ

というものをまた知ったわけですよ。

話しがどんどん長くなるので、少しはしよりますと、今日は「ピアノとベートーヴェン」という題に即してお話をするとということになっております。

我々は、今日、音楽史を上から俯瞰的に全部ながめることができます。偉大なバッハがバロックを大成したといわれていますが、神様がそう仕向けたんじゃないかと思うわけです。同様にベートーヴェンについても、そういうことが考えられるのです。ベートーヴェンの時代というのは、偉大な先生のハイドン、そして天才的なモーツァルト、そういう人たちが歩んできた道をさらに進めてベートーヴェンの時代に楽器が発展・発達をとげて現在の楽器に近くなってきたわけです。バッハの頃というのは、鍵盤楽器はほとんどクラビコードかチェンバロしかありませんでした。まことに簡単な楽器でバッハの時代には、ピアノがなかったのです。

モーツァルトの頃になってはじめてチャラチャラ軽い楽器で弾けるようになったために、モーツァルトはピアノ協奏曲をたくさん書いています。モーツァルトが天才的なピアノ協奏曲を多く書いたことによって、先生であるハイドンは——、ハイドンという作曲家はあらゆる分野の作品を書いているのですが、ピアノ協奏曲は書かなかったのです。チェンバロ協奏曲はありますけど……。というのは、おそらくハイドンはモーツァルトを見て聴いて、自分はこの分野をやらなくていい、モーツァルトがやってくれると思ったのでしよう。ハイドンはまた弦楽四重奏をたくさん書いています。ところがその最後の頃になって、ベートーヴェンが弦楽四重奏曲を書いた時に、彼は筆を折るのです。もうそれ以後、弦楽四重奏を書かなくなる。これがまた、ハイドンの偉いところだと思います。

ハイドン、モーツァルトを経てベートーヴェンの時に、今あるようなピアノが出来上がって、楽曲としてはソナタ形式というのをベートーヴェンが完成させたといわれています。今ここに八十八鍵のピアノがありますけれど、ベートーヴェンの時は、FからFまで六十一鍵しかなかったのです。アパッショナータの時、初めて、六十八鍵というF

からうえのCまでという楽器ができあがりました。今これが八十八鍵ですから、それよりもまだ二十鍵多いですね。上下に多いわけです。ベートーヴェンは、その六十八鍵を使って、上から下まで縦横に駆けずり回るような作品をアパッシヨナータで書いているわけです。ですから、長い音楽史の流れを見ると、バッハから始まって、ハイドンを通じ、モーツァルトを通してベートーヴェンのアパッシヨナータが鍵盤楽器の頂点である作品といわれてもおかしくないのです。

ところで、ベートーヴェンはピアノの名手でしたから、生涯心を託すことができた楽器としてピアノというのを選んだわけです。ベートーヴェンのピアノ曲をずっとたどっていくことによってベートーヴェンの精神的な発展の歴史、作曲の技法すべてを推察することができるわけです。ソナタ形式の完成というのは、音楽家にとって大変なことでした。まあ、簡単にいえば一楽章がアレグロであり、二楽章がアンダンテあるいはアダージオであり、あるいは三楽章がメヌエットからスケルツォに至り、四楽章が Rond 形式でそれを最後に拡大してフーガ形式ということ。それは、全てベートーヴェンが完成したことで、これをシンフォニーとか室内楽とかの大きな作品に使うようになった。そのベートーヴェンの頭の中には二元的、対立する概念というのがありまして、デュアリティといいますが、相反する性格のものを並列する傾向があった。それから二楽章形式という大きな流れを誘発することになった。

音楽と言うのは時間の芸術ですから、五分のものは五分聴いてからその印象を得る、三十分の作品は三十分聴いた後でその印象を得ることが出来る。初めにばっと見てものがわかるという性質のものではないのです。しかもそれは、印象でしかないから、繰り返して聴くことによって、あるいは分析的に楽曲を解析することによってはじめて、全貌がわかるわけです。コンピュータはその頃ありませんでしたから、ずっとインプットして、ばっと見るわけにはなかったのです。だから、名曲というものは、そういう鑑賞に耐える立派な形式をもっていなければならなかったのです。しかし形式というのは、楽曲の形ですから、その背後にあるものがどういう意味をもっているのかということ

に、思いが至らなければ、その形式だけを見たのではわからないのです。

少し雑談のように聞こえますが、これはその形式を説明する下敷きになるので、皆さんよくご承知のように、ペー
トーヴェンというのは、あまり美男子ではなかった。非常に気の毒なというほどでもないのですが、醜男であったら
しい。しかし生涯非常に女性にもてた。なんでそうなったのだろうといういろいろみんな解説しているわけですが、ペー
トーヴェンというのは真実の追究を常にやっていた。単刀直入に物を言って、しかもそれが非常にユーモアがあった。
そして誠実であった。そういうことが魅力であったのではないかと思われます。

よくペートーヴェンにまつわる五人の女性という話しをしますので、ペートーヴェンがボン時代に非常に親し
くお世話になっていたプロイニングという家系があったのです。そこのお嬢さんでエレオノーレ・プロイニングとい
う女性がいます。そしてペートーヴェンのボン時代から生涯親しくつきあい文通していたお医者さんがいました。そ
れがヴェーゲラーというお医者さんなのですが、そのお医者さんの末裔が、今コブレンツというボンからひとつライ
ン川を下がってきたところのモーゼルへ行く三角形のところにある町ですが、そこでワイン業をやっています。ライ
ンのワインを造っているのです。なんでそんな話をするかというですね、そのワインセラー、地下室の深い所に
代々そのヴェーゲラーが守ってきた宝物がある。そのエレオノーレという女性は、あとで枢密顧問官ヴェーゲラー博
士（お医者さん）の奥さんになったのです。

ペートーヴェンが死んでしまっただけから、いろいろペートーヴェンの昔のことを収集したのです。ほんとうかうそか
分かりませんが、ペートーヴェンが洗礼を受けた時の帽子であるとか、髪の毛であるとか、雑記帳の切れ端だとか、
ペートーヴェンとエレオノーレがたくさん文通をしたわけです。ボン時代の青年時代、若い時に誕生日や何かのお祝
いごとなどで文通したそれらを全部丹念に集めて、そのコブレンツのワイン業の地下室の所に埋めてありました。大
きな立派な銅で囲った種々象嵌がしてある大きな箱に入れて埋めてあったのです。それは、戦争中にナチも気がつか

なかったのですね。

戦後になって、つい数年前に家族会議を開き、これをベートーヴェンハウスに寄贈しようということになって中を開けてみたら、今まで知らなかった文章がたくさん出てきました。

そのエレオノーレという女性が、ベートーヴェンの生涯にとって最初の情熱の対象であり、若き頃の思い出であったとはっきりわかるのですね。それと、ベートーヴェンが耳の疾患でハイリゲンシュタットの遺書を書きます。それよりも前に、ヴェーゲラー博士に自分の耳の疾患の事を相談している手紙が出てきたのです。そういう、大変衝撃的な感動的な文章、そして品物がたくさん出てきて、それがベートーヴェンハウスに展示されています。

ところで、なぜそういうことを言うかといいますと、ベートーヴェンの中で不思議な音楽の調性があるのですね。変イ長調。これは単純に今まで、単純でもないけれど、生涯満たされなかった母性に対する憧れであるとか、そういうふうには解釈されていた。例えば悲愴ソナタの二楽章であるとか、運命交響曲の第二楽章であるとか、変イ長調であるのは、そういう調性だと簡単に（簡単にでもないですけど）思っていた。ところが、フィデリオの中のレオノーレを表わすそのメロディというのは、変イ長調で出てくるのですね。ベートーヴェンというのは、生涯その変イ長調にこだわって、最後の三つのソナタの中の一一〇というすばらしい作品は誰にも捧げていないですよ。これが、どうして誰にも捧げなかったか、というのが長いことわからなかったのだけれども、どうもそういうことでないかという推測がつくわけですね。

また時間がほとんどん経つので、五人の女性の話なのですけど、アパッシヨナータという作品はブルンスヴィック家のフランツというその青年に捧げたことになっています。ところが、そのブルンスヴィックというのはテレゼというのが長女で、ジョセフィーヌが次女で、フランツが三番目、シャルロッテというのが、末の女性。そしてベートーヴェンが死んだときに、秘密の引き出しを開けたら写真が出てきて、シントラーという早台点する公僕がベートーヴェ

ンの召使いみたいいろいろ身边を世話していたので、その人が、「ああこれはテレゼだ」と言ったので、テレゼと不滅の恋人という手紙が結びついてしまってますね、不滅の恋人はテレゼということに長いことなっています。それで、その立ち会った人たちはすぐ、すぐでもないですが、四十から五十年たって死に、長いこと不滅の恋人は誰だということ推論があったわけですね。

ところが、話をはしりますけど、どうもテレゼではなくてジョセフィーヌではなくたかというのが最近になって言われるようになった。それは、今世紀になってからジョセフィーヌに宛てた十三通のラブレターというのが発見されたということがあるわけです。そうしてみると、そのアパッショナータを捧げたのはフランツなんだけれども、フランツという青年は女性に囲まれたあまり感情の豊かでない男であったようなんです。それに、ベートーヴェンがなんでアパッショナータのようなすばらしい作品を捧げたかということが長い間問題にされていたので、どうもベートーヴェンのめばしい相手方はジョセフィーヌでなかったか……。ところがですね、そこに一つ問題があつてですね、その手紙というのはみんなSofie（あなた）というふうに書かれている。ところが、発見された不滅の恋人はDorothea（ドロテア）ですね。お前という非常に直截的な名称で書かれている。だから、どうもジョセフィーヌでないということで、長い間、ああでもないこうでもないと言っていたところへ、最後の三つのソナタというのが出てくるのです。ベートーヴェンの伝記をお読みなればよくわかることですが、ベートーヴェンの年代として一八一二年一三年という謎の年というのがあるのです。この頃ベートーヴェンは創作がほとんど出来なくなって、もうベートーヴェンは創造力が枯渇してだめになったのではないかとみんなに言われていました。ところが、どうもそうではなくて、その時に大事件があつたという通説なのです。それを最近になって、駅馬車の発着の日から天候まで、まるで推理小説のように丹念に辿つてですね、一八一三年という数字がでてくるのです。そしてベートーヴェンが四三歳ぐらいではないかと……。そうするとその日は、ベートーヴェンの四三歳の時しか可能性がないそうです。宿帳も全部繰ってみたとかですね。そう

いうふうにして、それから十何年たって一八二〇年から二三年にかけて最後の三つのソナタというものが書かれているわけです。しかも、第九シンフォニーとミサ・ソレムニスの間に書いたといえますから、ベートーヴェンというのはすごいですね。そして最初に一〇九というのがありますが、これをブレンターノ家のマクシミリアーネという女性に捧げます。それが一七歳の女性なのです。いくらベートーヴェンでもね、一七歳の女性にそんなすばらしい逸かな恋人に寄せるようなメロディーをちりばめた曲を贈るわけがないと誰でも考えますよね。そうすると、その母親のアントーニアという女性が浮かび上がってくる。ブレンターノ家のアントーニアとベートーヴェンというのは、最後に非常に重要なかわりがあったのではないかと、そうなってくるわけです。ところが、その三つのソナタをルドルフ大公が見て、「俺にも一曲よこせ」と言って、一一一を取ってしまったのです。

ところが、ベートーヴェンはその一一〇の変イ長調の作品は誰にもがんとして渡さなかったのです。そしていろいろシントラレーヤなんかの話しを総合すると、その三つのソナタはアントーニア・ブレンターノに捧げるために書かれたということになっていのです。そうすると、その不滅の恋人というのはどうも、アントーニア・ブレンターノでないかという説が最近になって勃然として浮かび上がってきました、先程お話しました青木やよひさんの本には、それが克明に推理されております。

しかしこれは、ベートーヴェンに聞いてみないとわかりません。ベートーヴェンは非常に人をはぐらかすことで有名で、ある時みんなが月光のソナタ、月光のソナタと言っているけれども言ったら、俺はテレゼの曲のほうが好きだというようなことを言ったとか、そうすると、それをもとにしてテレゼがその本命でないかと、シントラレーヤすぐ早合点する……。

その前に、月光というのは、ジュリエッタという女性がいたわけですね。月光はそれをイメージして書いた作品です。すから、初めのレオノーレがあって、ジョセフィーヌがいて、テレゼがいて、そして最後にブレンターノ家のアン

トニーアがいたのではないかと言うことです。これは本当にベートーヴェンに聞いてみないとわからない。

まだ、いろいろお話しするつもりだったのですが、あんまり時間がないので、ロマン・ロランという作家は、ここにもいろいろプログラムに書かれていますけれども、ユマニストであり、偉大な思想家であり、そして文芸評論家でもあり、そして作家であった。ロマン・ロランという人物を称えるためには、いろいろな方法があるだろうと思うわけです。しかし、私がそもそも日本のロマン・ロラン友の会の創立、五〇年前のことではありますが、それにベートーヴェンという作家の代表的な作品を図らずも、私はその時はわかってなかったと思うのですが、周りの偉い方々が、こういう曲を演奏してくれと言うので、演奏したことが機縁になって、今日このようにみなさんにお集まりいただいてこれから演奏することになりました。

ベートーヴェンとの関わりを、私の関心事、そして、思い起こせばいぶん古い話なのですが、それがだんだん変化してきたということを、みなさんに多少なりともおわかりいただけただけだと思います、これでお話しを終わりたいと思います。

ありがとうございました。

(一九九九年十月八日、京都コンサートホール(小)において演奏に先だってお話されたものです。)

ロマン・ロランとインド

森本達雄

本日は、これから「ロマン・ロランとインド」というテーマでお話しさせていただきます。このテーマは、ロマン・ロランという多角的で総合的な巨大な人格のなかでも、音楽や社会・平和思想とともに、きわめて興味深いテーマの一角をしめております。

ところで、今日からいよいよ一九九九年も師走月に入りますが、年が改まれば二〇〇〇年ということ、今年の師走は毎年繰り返される年の瀬とは違った、一つの世紀の終わり（正確には、二十一世紀は二〇〇一年から数えるようですが）といった、なにか感慨深いものがございます。

そんな思いのなかで、あらためて私たちが生きてまいりました二十世紀をふりかえりますと、それはよく言われるように、科学技術の驚異的な進歩と戦争の世紀として特徴づけることができましょう。

科学技術も戦争も、もちろん今世紀に特有のものではありません。それは人類の歴史ともあったといえましょう。人間は狩猟や耕作を始めたときから、すでに道具を使っておりました。土を耕すのに手を使ったのでは指先が痛いし怪我をする。そこで手の代わりに木片や石を使う。鳥や獣を捕るには、どうしても素手ではかなわない、そこで弓矢や槍を考え出す。あるいは自分の力ではどうしようもない重い岩や木材を運ぶのに、牛馬といった力の強い動物やてこを利用する。また、速く疲労せずに遠くの目的地に到達するために、馬やラクダを飼い馴らして足の代わりにした

り、丸木舟を利用する。こうして、人間は原始の時代から徐々に科学技術を発展させ、やがて、ピラミッドや万里の長城といった巨大なモニュメントを築きあげ、さらに近世に入ると、産業革命によって、直接手足を使わず、機械にその代用をさせるようになりました。

しかし二十世紀に入ると、そうした人類の何千何万年という長く営々とした進歩の歴史に、大きな質的な変化が起こりました。すなわち、第一に、これまで人間の手足や肉体の延長としての機械であったものに加えて、頭脳の代理としてのコンピュータが作り出されたこと。第二に、人類の長い夢であった大空へ、さらには宇宙への飛行を実現したこと。そして第三にこれまで神の創造の冒すべからざる領域として神聖視されてきた、生命の分野にまで科学がかかわりはじめたことです。

そして、人類はいま、自らが作り出した驚くべき科学の力に脅威を感じながら、人間の幸福にとって科学が両刃の刃であることに気づき、自然破壊や環境問題、生命の尊厳の問題などをあらためて真摯に問うようになりました。しかし本日は、この問題がテーマではありませんので、話をつきに進めさせていただきます。

同じように、二十世紀は、戦争の世紀とも呼ばれておりますが、それは科学技術の進歩の歴史が、ここにきて質的な変化をとげたように、戦争もまた、以前の戦争とは大きく様変わりをしたということですが、悲しいことですが、人類の歴史は戦いの歴史であったと言っても過言ではありません。侵略や争いは、おそらく、私たちの知らない有史以前から続いてきたに違いありません。しかしそれらは、種族と種族、地方と地方、王国と王国、あるいは一国と一国、多くとも周辺の数か国が巻きこまれて戦うということでした。それが、今世紀に私たちが経験した二度の世界大戦や、また最近の湾岸戦争でも見られたように、戦場は一地方に限られていても、世界の多くの国々がなんらかの形でこれに参加するといった、世界的な規模のものに変貌してしまいました。また戦争そのものも、以前とはちがいで、巨大な科学の力と結託して、空から、あるいは遠く見えないところから爆撃を加え、それも瞬時にして何千何万という、老

人や子供、病人までも含めた非戦闘員を平気で殺害するという、一世紀前までは鬼神すら考えなかったような恐ろしい殺人ゲームになってしまいました。

しかしいっぽう、いま人類は、この世紀を終えるにあたり、野放しの科学の進歩にブレーキをかけなければならぬと考えはじめ、また恐るべき戦争の教訓から、平和・共存を心から切望するようになったことも事実です。人類が今日ほど、戦争と平和、民族や国境の問題を真剣に考えたことはなかったと思います。たしかに人間は、身を危険にさらしたり、心に痛手を負うまでは、目先の損得から目を離し、未来を考えることはできないようですが、二十世紀に二度も体験した戦争の悲劇から、イギリスの詩人コールリッジのいう「悲しい経験で賢くなった苦勞人」として、戦争のない二十一世紀を願っています。もしほんとうにそのことに人類が目覚め、地上から戦争がなくなるとすれば、二度の大戦をはじめ、数々の紛争で奪われた犠牲者たちの死が、いくらかでも報われることになりましょう。

この平和共存にいちはやく目覚め、その実現に向けて立ち上がったのが、二度の大戦の中心舞台となったヨーロッパであったというのは、けだし自然なことだと思われまふ。ヨーロッパの国々は、これまでどおり互いに近隣国を信じず、憎悪をつのらせ、軍事力の増大にきゅうきゅうとしていたのでは、それこそ詩人タゴールの言ったように、古生代にマンモスが互いに相手より強くなろうとして、牙を巨大化し、自滅していったように、共倒れになるのではないか、それよりも話し合いによって、互いに理解を深め、信用し、協力し合ったほうが得策ではないだろうか、そう考えるようになりました。こうして、久しく相互に憎しみ合い、争ってきたヨーロッパの国々のあいだに経済や外交、安全保障などの面で国境なきゆるやかな共同体をつくろうという気運が高まりました。

ところが、こうした思想は第二次世界大戦後に初めて政治家や経済学者たちによって考え出されたものではありませんでした。その理想を実際の声にしたのはオーストリアのクーデンホーフ・カレルギー伯爵でした。カレルギーが第一次世界大戦の悲惨さを目のあたりにして、『パン・ヨーロッパ』という本を書き、ヨーロッパの統合を提唱した

のは、第一次世界大戦後の一九二三年でした。(なお、この人のお母さんが青山光子という名の日本人女性であったことはあまりにも有名です。)このときのカレルギー伯の理想は、まず長いあいだ犬猿の仲であったフランスとドイツを和解させ、ヨーロッパの国々を連邦国家に参加させて、大陸に恒久平和を築くことでした。そこで一九二六年に彼はウィーンでパン・ヨーロッパ会議を開催しましたが、彼の夢はヒトラーの出現によって無残にも破られてしまいました。

しかし、いまにして考えてみますと、ヒトラーの猛々しい軍靴もカレルギーの撒いた夢の種をけっして踏みつぶすことはできなかったのです。種はじっと第二次大戦中の冬の季節を耐えしのび、一九六七年にヨーロッパ共同体の発足として新たな芽を出したのでした。その後その計画は、通貨統合、共通の外交・安全保障、国境なきヨーロッパを目指すヨーロッパ連合からEUへと発展していったことは周知のとおりです。思えば、EUがこのように戦争の産物であったというのは皮肉なことです。

ロランの話の前置きがEUにまでひろがってしまいました。それは、ひとつには世紀の締めくくりとして二十世紀の戦争と平和の歴史をふりかえってみたからですが、それと同時に、ロランの思想がこうした問題とけっして無縁でないことを思い出したからです。と申しますのは、ロランは本国フランスでも、またかつてはあれほど多くの読者に愛された日本でも、近頃は過去の作家として忘れられがちですが、ロランは今世紀初め、すでに今日のヨーロッパのあるべき姿を提言し、さらに人類の歩むべき方向を示唆していたことを思いますと、彼の作品はけっして過去の文学作品ではなく、二十一世紀へのメッセージとして、あらためて読みかえす必要があるかと考えるからです。

クーデンホーフのパン・ヨーロッパ思想にロマン・ロランの作品が直接的な影響をおよぼしていたかどうかは、残念ながら私の勉強不足のため、いまは明確に申しあげられません。たぶんクーデンホーフもなんらかの形でロランの

思想を知っていたとは思いますが、それは今後の課題にさせていただきます。いずれにしましても、汎ヨーロッパという理想は、けっしてクーデンホーフ独自の発想ではありません。それは早くから、ヨーロッパの良識ある知識人のあいだに醸成されてきた思想でした。たとえばドイツの哲学者カントも、彼の倫理的・政治的理想からヨーロッパの恒久平和を念願していましたし、共和主義者として知られるフランスの文豪ヴィクトル・ユゴー（ユゴーが若きロランに大きな影響を与えたことはご承知のとおりです）も、「ヨーロッパ合衆国」を提唱したのでした。このように思想というものはけっして一人の人間が思いつくものではなく、長い時代背景のなかで整理・収集されるものです。ロランの思想も、当時のヨーロッパの知識層のあいだでは、賛否両論はあったにしても、広く知られていたはずです。

さて、ロランのパン・ヨーロッパ思想は、彼の大河小説『ジャン・クリストフ』のなかにみごとに表現されており、一九〇三年から十年がかりで書かれたこの作品は、第一次世界大戦の二年前一九一二年に完成されており、から、ロランは、パン・ヨーロッパの政治的提唱者たちが大戦によってその必要を痛感する以前に、すでにその理想を作品のなかに掲げていたのです。周知のとおり、『ジャン・クリストフ』の主人公クリストフは、ベートーヴェンをモデルにしたドイツ人の音楽家です。そのために、第一次世界大戦が勃発したとき、フランスでは、フランス人の作家がなぜ敵国民を主人公にした作品を書かなければならなかったのかと非難されたそうですが、この小説の大きな意味は、むしろそこにあったと申せましょう。

ジャン・クリストフ・クラフトのクラフトは、ドイツ語で「力」を意味します。もちろんここに言う「力」は権力の意味ではなく、生命力のことです。つぎにロランは、クリストフの友人にフランスの青年オリヴィエを登場させています。オリヴィエはフランス語でオリヴの木、すなわち知性の象徴です。したがってクリストフとオリヴィエの出会いと友情は、ドイツ的創造力とフランス的知性との出会いと友情を意味します。それぞれが互いに他方を補いつつ人間の完成を目指すのです。ロランはオリヴィエのなかに、幼年時代からの自分の性格を色濃く投影しているとい

いますが、ロランはオリヴィエのように夢みがちで、「神秘精神への傾向をもっていた」ようです。と同時に、大戦中に敵からも味方からも轟々と非難されながらも「戦いを超えて」、人間愛と平和を叫びつづけたあのしんの強さにおいて、彼はまたクリストフ的でもありました。

クリストフは親友オリヴィエを偶然の死によって失ったあと、悲嘆のあまりスイスの山中へ行きます。そこで彼はかつてピアノ教師をしていた頃の弟子グラチアに再会します。グラチアはクリストフに好意をいだいていた少女でしたが、いまはベレニー伯爵の未亡人として、子供たちとともに静かな生活をいとなんでいました。グラチアという名前からも容易に想像できますように、彼女はイタリア生まれの優雅なやさしい女性でした。情熱的なクリストフは彼女との結婚を夢みますが、彼女からきっぱりと断られます。しかしこのことによって、二人の魂はいっそう強く、固く結ばれるのでした。

物語の筋はさておき、私がここで申し上げたかったのは、大河小説『ジャン・クリストフ』では、こうしてクリストフ、オリヴィエ、グラチアに象徴されます、ドイツとフランスとイタリアのそれぞれの民族の最もすぐれた精神の友情とユニテが物語の伏線になっているということです。(姥原徳夫『ロマン・ロラン研究』第三文明社参照)

私は最初にロランをEUの理想の先駆者と呼んだわけがわかりただけだかと思えます。以上のことは、今日お集まりのロランの読者のみなさまには、いまさら申し上げるまでもないことと思えますが、話の進展の必要からと、ロランの思想の今日的意義の再確認のためにお話しさせていただきました。

ところが、このようにロランの理想がたんにフランスと隣国ドイツやイタリアから全ヨーロッパへとひろがっていっただけではなく、ヨーロッパの境界を超えて、さらにアジアへとひろがり、ヨーロッパとアジアとの結合、いわば人類のユニテの方向へと拡大していったことは注目に値します。ロランとインドとのかわりはそのことの重要な証^{あかし}であります。

とはいっても、ロランはいわゆるインドロジストと呼ばれるインド学の専門家ではありません。十八世紀末から十九世紀にかけて、ヨーロッパ勢力のインド進出、とくにイギリスのインド支配が確立するなかで、当初は好奇心から始まったヨーロッパ人たちのインド——とりわけ古代文明への関心が、やがて本格的な学問研究へと発展し、十九世紀後半から二十世紀に入りますと、イギリスやドイツ、フランス、イタリアでは、錚々たるインドロジストたちを輩出しました。いまちよっと思い出すだけでも、膨大な『梵語大辞典』を完成させたドイツのベートリンクとロート、『東方聖典』五〇巻で知られるオックスフォード大学のマックス・ミュラー、ヴェーダ研究の権威オルデンベルグ、のちほどお話ししますフランスのシルヴァン・レヴィなど枚挙に暇はありません。もちろんロランを、このようなインド学者の系列に加えることはできません。なぜならロランは、インドの宗教や歴史・哲学を客観的な学問の研究対象として、新たに発見されたサンスクリット語やパーリー語の文献、考古学の資料を駆使して分析・批判を加え、独自の学説を提示するといった、いわゆるアカデミックな研究方法をとらなかったからです。ロランにとってたいせつなことは、インドの思想の森深くに分け入り、そこに自己(ヨーロッパ)の精神との、人類的綜合を求めることでした——ちなみに、老ゲーテがインド思想の深遠な森を前にして、その奥深くに迷いこみ、いまさら思想に混乱を来すのを惧れたことはよく知られています。

ロマン・ロランのインド関係の主要な著書には『マハートマ・ガンディー』(一九二四)と、『生きたインドの神秘思想と行動』三部作、すなわち第一巻『ラーマクリシュナの生涯』(一九一九)、第二・三巻『ヴィヴェカーナンドの生涯と普遍的福音』(一九三〇)、このほかに死後に出版された、一九一五年から一九四三年の死の前年までの二十八年間の長きにわたるインドとの精神的、また現実の人物たちとの交流の貴重な記録を克明につづった『日記』(一九五一)がごさいます。この一冊を読んで圧倒されるのは、タゴールやガンディー、ネルーほか、当時のインドの最高の民族の指導者たちが直接ロランを訪ね、友情をあたためあい、また公私さまざまな問題について意見を交わし、助

言を求めていることです。一九二三年にロランがスイスに移ってからは、レマン湖畔のヴィルヌーヴのロラン邸は、さながらヨーロッパにおけるインドの精神のセンターの感があったといつても過言ではありません。

それでは、ロマン・ロランがいつごろからインド思想に関心をいだくようになったか、その動機と発展の跡をたどるのは容易な作業ではありません。ロランとインドとの具体的な関係は、『日記』に見るかぎりでは、一九一五年二月に、当時イギリスに在住していたインド人学者アーナンダ・K・クーマラスヴァミーから、ロランにささげられた「インドのための世界政策」と題する論文が送られてきて、二人の間に文通が交わされたことから始まったのはたしかです。しかし、それ以前にロランはすでにインド思想にかなりの関心をいだいていたことも明らかです。

まずその証の一つを、私たちは『ジャン・クリストフ』の「家の中」の、オリヴィエとクリストフのつぎのような対話に読むことができます。

オリヴィエが言う——「僕は半世紀だけお先へ飛び越して生きたいね。奈落に向かつてのこの突進は、何らかの仕方で停止しなければならぬ。……（略）……西欧はわが身を焼きほろぼしている……まもなく……まもなく……東洋の遙か向こうからさし登りつつある別の光が、早くも僕には見えている」

「東洋なんぞ僕はごめんだ！」とクリストフが言った——「西洋は、言うべきことをまだすっかり言いつくしてはいない。この僕が降参するなどと君は思うのかい？　僕にはまだ数百年の将来がある。生命ばんざいだ！　歡喜ばんざいだ！　われわれ自身の運命との戦いもばんざいだ！」

〔片山敏彦訳『ジャン・クリストフ』第七巻、みすず書房、一九五一—六ページ〕

氣質的にはむしろオリヴィエのほうに自らを多く投影したロランは、ヨーロッパ——とりわけドイツ音楽への確固

たる信念ゆえに、ヨーロッパの境界を超えて外の世界を見ようとするクリストフに、ヨーロッパに差し迫る精神の危機を指摘して、外の世界に、アジアに目を向け、その救済の道を指し示そうとします。しかし、世界を動かす「行動の力」「行動の原理」以外になにもも信じようとするクリストフには、アジアは消極的・否定的な諦めと非行動的精神主義の世界にしか映りません。

クリストフは言います——「君たちが言う『生』への断念の言葉全部の底に同じ深淵が隠れている。ただ行動にのみ生命がある」（同書、二七八ページ）と。ここで片山訳の定本となった決定版の「同じ深淵が隠れている」という箇所が、初版本では「同じ仏教的涅槃をおおいつつんでいる」となっていることに注目したいと思います（山口三夫訳・講談社版参照）。すなわちこの二人の親友の対話からもうかがえるように、『ジャン・クリストフ』執筆当時のロランはまだ、西洋世界一般が東洋思想にたいして漠然といただいていた印象や先入観、すなわち、シヨールペンハウアーに代表されるようなインドの宗教的諦観の思想を引きずりながら、これから彼が発見することになる「インドの行動の精神」への予感の方向へと歩みつつあったといえましょう。

こうしてロランのインド研究は、当時のヨーロッパの知識人の多くに見るような、たんなるアジア世界へのエキゾテックな好奇心に発したのではなく、彼のインド思想の体験そのもの、いいかえると、ロランの内なるインド的精神の発見の過程であったといってもよいかと思えます。なぜなら、同時代のほとんどの西洋のインド研究者たちが、知性によって対象としてのインド思想を分析・批判しようとしたのにならして、ロランの場合は、自らの内深くに潜在しているインド的魂との照応によって、ひたすらそれを体験的に理解しようとしたからです。このことに関連して、一九二三年の日記にたいへんおもしろい記述がございます。

そのころパリに留学していて、しばしばロランを訪ね、ロランのガンディー伝の執筆などにも協力したカリダース・ナーグ（彼はその後カルカッタ大学の歴史学の教授になり、独立後のネルーの平和外交に重要な役割を果たしました。

一九五四年四月に來日されたとき、宮本正清先生に連れていただきナグ教授に会ったのは、私の若き日の貴重な思い出の一つです。が、帰国後ロランのことを書くために、ロランの過去について質問したことがあります。ロランは彼のために古い書類をとりだして——『日記』によれば——「特徴的なある時期の文章を彼に読んで聞かせる。私はこの内部の生命の力に、またフランスの環境のなかにおけるその例外的な性質に、ナグと同様におどろく。一八九〇年のジャンニコロの丘における啓示、ルナンへの訪問、云々」（傍点は筆者）とあります。ここでロランは、過去の思想体験のなかに、たとえばジャンニコロの丘の啓示に、西洋的なものからすれば明らかに例外的な性格を、インドの青年とともに発見して驚いたのです。

ロマン・ロランといえば、平和思想や社会正義をつらぬいた二十世紀を代表する人道主義作家の旗手としてよく知られておりますが、ロランにはもうひとつ、言葉の本質的な意味での神秘主義的な側面があったことは、若き日の魂の自伝である『内面の旅路』を読めば明らかです。そしてロラン自ら、この二元性に早くから気づいていたことは、彼がトルストイについて語ったつぎの言葉がよく物語っています。

しかしトルストイは法悦だけで満足するインドの神秘主義者ではなく、彼のうちではアジア人の夢想到西洋人の理論辯と行動欲とが混じっていたために、自分の天啓を実践的な信仰のうちに現わし、その清い生活から日常生活に對する規則を導き出す必要があったのである。

（姥原徳夫訳『トルストイの生涯』、岩波文庫、七二ページ）

ロマン・ロランの思想と生涯をトータルに知るためには、この精神の深化と行動の広がり二元性を無視することはできません。しかしロラン自身、二元的な両極の間をいつまでも時計の針のように揺れ動いていたのではなく、より高度な一元化の方向に向かってたえず努力していたことを忘れてはなりません。そのことは、彼が生涯のそれぞれ

の段階で、自分の心の道づれとして書いた『ペーターヴェンの生涯』に始まり、『ミケランジェロの生涯』『トルストイの生涯』……などを経て、『ラーマクリシュナの生涯』『ヴィヴェカーナンドの生涯』に至る一連の伝記作品のなかにはっきりと読みとることができません。

ところで、ロマン・ロランのインドとのかかわりがアーナンダ・クーマラスヴァミーとの交流によって現実の形をとったことは、先ほど申し上げたとおりですが、それから四年後の一九一九年に詩人ラビンドラナート・タゴールを知り、二人の間に国境を超えた深い友情の絆が生まれたことで、ロランのインドの魂への愛と、東と西とのユニテへの確信がいっそう強まることとなります。

タゴールは一九一三年に一冊の小さな宗教詩集『ギタンジャリ』によって、アジア人として初めてノーベル賞（文学賞）を受賞し、たちまち世界の桂冠詩人となります。そして彼は一九一六年五月に念願の日本訪問を果たします。時あたかも日本は軍国主義の高揚期にあり、アジアの姉妹国の詩人がノーベル賞に輝いたということで、当初は朝野をあげて熱狂的に詩人を歓迎しますが、三か月の滞在中にタゴールが目にあたりにした現実の日本は、彼の久しい期待を半ば満たすと同時に、半ば裏切ることとなります。すなわちタゴールは、日本人の生活の隅々にまで浸透していた繊細な美意識や礼儀正しさ、簡素で勤勉な生活態度に心をうたれ、『日本紀行』にそうした日本人の美德を口をきわめて賞賛しました。この本はベンガル語の原書でわずか一二〇ページほどの小冊子ですが、外国人の書いた数ある日本人論のなかでも白眉の一つに数えてもよいかと思います。私の拙い翻訳（『タゴール著作集』第一〇巻所収、第三文明社）がございますので、なにかの機会にお読みいただければ幸いです。

ところがいっぽう、時代の予言者と呼ばれたタゴールの鋭い洞察力は、そのころ日本社会のいたるところに台頭していた帝国主義的・軍国主義的傾向を見逃すことはありませんでした。ことに、イギリス支配の重圧に苦しむインド人として、詩人は日本の中国侵略を深く悲しみ、また日本社会をおおっていた無反省な西洋物質文明の模倣に失望し

ました。彼は東京帝国大学や慶応義塾大学などでおこなった公開講演で、日本のそうした軍国主義への傾斜や、今日の日本社会にも通じるような拜金の商業主義を痛烈に批判し、迫りつつあった世界の物質文明と戦争の危機にいち早く警鐘を鳴らしたのです。そのために日本におけるタゴール熱は、その高まりの速度と同じ速さで、冷却していったといえます。

このときロランは、タゴールの東京帝国大学での講演「日本に寄せるインドのメッセージ」をニューヨークの「アウトルック」誌（一九一六年八月九日号）で読んで深い感銘を受け、それを「世界史上一つの転換点を示す」発言と評して、文章の一部を仏訳して、自分の論文に引用し、紹介したのでした。

ついでロランは、一九一九年三月に、第一次世界大戦後のヨーロッパの精神の危機を憂慮して、有名な「精神の独立宣言」を起草し、ヨーロッパやアメリカの自由で指導的な知識人や芸術家たちに結束を訴え、署名を呼びかけました。さらに彼は「アジアの英知が加わることを願ひ、タゴールにも手紙を送って参加を求めたのでした。署名者のなかには、アインシュタイン、アラン、クロッチェ、ゴリキー、ヘッセ、ツヴァイクなどの名前が見られますが、タゴールもまた早速署名に応じました。爾来ロランとタゴールは、一九四一年に詩人が世を去るまで、二十余年にわたって深い友情で結ばれることになりました。

このときのタゴールの応答にたいするロランの返事は、まさに彼の二十一世紀の世界へのメッセージと言えましょう——「ヨーロッパの破産を告げた、あの恐ろしい世界大戦の破局の後に、ヨーロッパだけでは自分を救うことはできないことが明らかになりました。ヨーロッパの思想はアジアの思想を必要としています。ちょうどアジアの思想がヨーロッパの思想を利用して自分の支えとしたように。それは人類の頭脳の二つの半球です。もしその一つが麻痺すれば、身体全体が悪くなります。その二つの結合と、その健康な発展とを、回復するように努めなければなりません。」

（姥原徳夫訳『タゴールとロマン・ロラン』ロマン・ロラン全集第四二巻・書簡X、みすず書房、二二二ページ）

翌一九二〇年から二一年にかけて、タゴールはヨーロッパやアメリカを歴訪します。このたびの詩人の旅行の目的は、今世紀初めに彼がベンガル州の人里離れた、その名もシャンティニケタン（平和のすみか）と呼ばれる閑静な原野の一隅で始めた小さなアーシユラム（修道場・学園）を、東西の思想と文化が「一つの巢のなかで出会うところ」を理想とする国際大学へと発展させるべく、世界の心ある人びとに支援と協力を求めるための講演旅行でした。

なお、タゴール国際大学は、一九二二年十二月に開学の運びとなりました。私は一九六四年から三年間、この大学で教鞭をとる機会にめぐまれましたが、当時はまだ創立者の薫陶を受けた老教授や芸術家たちが何人もおられ、学園はインドにおける一つの理想精神のセンターの感が深く、ほんとうに充実した日々を送らせていただきました。そして、大学で得た最初の友人が、パリ留学中にロラン研究所に足しげく通ったロランの熱心な読者であったことも、いまは懐かしい思い出です。

さて、この旅の途上、一九二二年四月にタゴールはパリを訪れ、三回ロランとしたしく対談をしました。それは、多忙な旅行日程のなかで、いわば友情の安らぎのひとつときであったにちがいありません。二人は人類の平和への願いや、芸術・音楽について、それからタゴールがヨーロッパでしばしば見聞した、ヨーロッパ人のアジア蔑視などについて、心おきなく話し合っておりまます。対談のなかでとりわけ注目されるのは、タゴールがロランにインド民族運動の近況、とくにガンディーの非暴力、非協力運動について詳しく話していることです。

当時インド国内では、数年前（一九一五年）に南アフリカから帰国したばかりの新参の民衆運動の指導者M・K・ガンディー——ちなみに彼を最初に「マハトマ（偉大な魂）」と呼んだのは詩人タゴールでした——が、「一陣の涼風のように」（ネルー）登場したことで、久しく昏睡していた民衆が豁然と目覚め、マハトマの指導のもとに、非暴力という人類未曾有の武器を持って、敢然と大英帝国に立ち向かっていたのでした。

そうした「インド人にたいして驚くべき影響力をもっている」ガンディーの人と運動について、ロランが注目する

ようになったのは、たぶん前年にロランを訪ねたインド人青年ディリップ・クマール・ロイの話を聞いてからだだったと思われませんが、このときロイが伝えたガンディーについての情報はかなり誤っていたようです。

ロイはガンディーを紹介するにあたり、「マドラスの弁護士だが、いまから七、八年前に、自分のいっさいの富を断念して、自国民の救済のために一身を投じている」と言っています。ガンディーの国民への献身については間違いないありません。しかしガンディーは、弁護士でしたが、マドラスの人ではありませんでした。またインドの政界に登場したのも、七、八年前でしたが、それ以前南アフリカで二〇年にわたって、同胞の人権獲得のために献身していました。後年、音楽家・思想家として一家をなしたディリップ・クマール・ロイはその頃ケンブリッジ大学に学ぶエリート学生でしたが、その彼にして、当時はまだガンディーについて、この程度のことしか知らなかったというのも無理のないことでした。なにしろ、一九一五年にガンディーが南アフリカから帰ったときには、インドではほとんど無名の政治指導者でしたし、一九一九年にようやく彼の第一回非協力運動が始まったばかりだったので。

それからわずか三年後の一九二三年の初めに、ロランはほんの二か月ほどで、あの名著『マハートマ・ガンディー』を書きあげたのでした。この間ロランは、先ほども話しましたように、タゴールの訪問を受け、その人の口から直接ガンディーについての率直な賞賛と批判を耳にし、またカリダース・ナグからもガンディーとタゴールへの民衆の崇敬と、二人のあいだの友情や思想上の相違・対立などについても詳しく聞くことができました。とくに、ガンディーの「ヤング・インディア」紙に発表された論文ほか、南アフリカやインドで刊行された彼についての英文の文献の読破には、妹マドレーヌ・ロランの協力があつたことも忘れてはなりません。

この本を読んで驚くのは、それがガンディーのインドでの闘争の初期の段階、すくなくとも第一回非協力運動の直後に書かれたものであるということです。このちガンディーは、二十五年間にわたって民族運動を指導し、第二回、第三回の大々的な非協力運動を展開し、祖国を独立に導くことになったのですから、当時はまだインド国内ですら、

ガンディーの評価は定まっていなかったのは当然です。したがって年代記的には、この伝記は一九二三年をもって終わっているわけですが、ガンディーの人格と思想の本質的評価においては、その後の二十五年をめぐりに予言した作品です。

ロランが自著をガンディーに送り、「不本意ながらいくつかの過ちをおかしているとしてもお許しただきたい」と書き添えたとき、ガンディーはつぎのような返事を書き送っています——「あなたがご論説のなかでところどころに過ちをおかしたとしても、どれほどの問題とよがあまりでしょう。わたしにとつて驚くべきことは、あなたがほとんど過ちをおかしていないということであり、また、あなたが遠く離れた異なった環境のなかで生活していながら、わたしの使命をこれほどまでに正しく解説してくださったということです。このことは、人間性はそれぞれ異なった空の下で花咲いてはいても、本質的には一つなのだということをおため立証するものです」と。

ここに、ロランのガンディー伝出版にあたって、インド学者がはからずもその評価を認めざるをえなかった、と考える興味深いエピソードがあります。学者というものは、おうおうにして自分の研究や学説に自信と誇りをもっているものです。そのこと自体はけっしていけないことではありませんが、ややもすれば、それが自分の研究のテリトリーをだれからも侵されまいとする縄張り根性につながりがちです。そこで、だれか部外者が彼の神聖なる学問領域に片足でも踏みこもうものなら、猛犬のように吠えたてることがあります。この頃、作家であるはずのロマン・ロランが、インド研究にまで手をそめ、インドの第一線の知識人たちと頻繁に交流をもっていたということで、フランスのインド学者たちから嫉妬や不興を買っていたらしいのです。

一九二三年九月の日記に、ロランはガンディー研究書を出したことで、インド学者たちから苦々しく思われていたことを記しています——「私の『ガンディー』は、泥池に石を投じたことになった。(私としては思いがけないことだったが)、現代インドに関して文献によった研究をフランスで出版する最初の人間が私だということである。インド学

者でもないのに、どうして私が東洋のことを語りなどしたのか？ シルヴァン・レヴィー（シャンティニケタンで昨冬を過ごした）はとくに気ををわくしている。なぜなら私は彼に先んじた（もちろんその気なしに）からだ。」

（宮本正清ほか訳『インド』ロマン・ロラン全集第三二巻、みすず書房、四〇ページ）

たぶん日記ということで、ロランは個人名を明記したのでしょうが、シルヴァン・レヴィーといえば、先ほども申しましたように、フランスのインド学・仏教学を代表する碩学です。彼はタゴールの招きでシャンティニケタンの大で講義をおこなって帰国したばかりでした。彼はまた三たび日本をも訪れ、日本仏教の研究や日仏会館館長をも勤めるなど、西洋世界に東洋思想をひろめた業績でも知られています。私はレヴィーの人物や性格については存じませんが、その業績から受ける印象では、知的で冷静な人物であつたらうと推察されます。ここで私は、ロランの日記からわざわざ著名なインド学者の垣間見せた狭量な縄張り根性を非難するつもりはありません。私が言いたかったのは、もしロランの著書が学問的・思想的に取るに足りないような駄作であつたなら、素人が自分の学問領域を侵害しても、だれもそれを気にかけることはなく、一笑に付したでしょう。したがってこの事件は、ロランの小さなガンディー伝が、レヴィーほどの大家をなりふりかまわず羨望させ、憤慨させたほどの傑作であつたことを雄弁に物語るものと思えます。

どうしてロランは、これほど短時日のあいだに、これほどすぐれたガンディー論を書くことができたのでしょうか。それは、もちろんロランの伝記作家としての力量によるところが大きいとは思いますが、なによりもガンディーとロランのあいだに人間的資質の類似・共感があつたからではないかと考えます。ロランの内なるインド的なもの、ガンディー的なものがこの作品となって結晶したと言っても過言ではありません。

ロランは早くも、初期の戯曲『聖王ルイ』（一八九七）のなかで、ガンディーの人格の片鱗を彷彿させています。ロランの描こうとした聖王ルイについての、ツヴァイクのつぎの言葉は、そのままガンディーの特性を語っています。

彼にはやさしさのほかはなにもなかった。しかしそのやさしさは、この上なく剛毅な人間といえども彼の前に出れば力をうしなうほどだった。彼は自分の信仰のほかにはなにもも持っていなかった。しかしこの信仰は巨山のような大業を彼になさしめたのである。彼は人民を勝利に導くことはできなかったし、また欲しなかった。

(S・ツヴァイク『ロマン・ロラン』上巻、大久保和郎訳、慶友社、一九五一年、八一ページ)

もちろん現実のガンディーは、三億五〇〇〇万のインドの民衆をひきいて、世界最強といわれた大英帝国に挑み、祖国に独立をもたらした民族の英雄ですが、私たちは、聖王ルイとガンディーの人間の本質のあまりの類似に驚くのです。

同様に、私たちは「万人のために万人に抗する良心の戦い」の途上で、戦時下の狂信的国家主義者の手にかかって葬られた、小説『クレランボー』（一九二〇）の主人公の死と、三十八年後の現実のガンディーのあの壮絶な死とを重ね合わせるとき、その不思議な符号に驚き、感動をあらたにします。その共通点は、二人ともに「真理の殉教者」だったことです。

私は長年にわたってガンディー研究に従事し、数多くのガンディー伝や評論を読んでまいりましたが、こうしたガンディーとの内面的な共鳴において、ロマン・ロランのこの小さな、いわば未完の伝記ほどにガンディーの精神をみごとに照射した書は稀だと思えます。

以上、本日はロマン・ロランとインドの精神の内的なかわり、同一性についてお話ししてまいりました。このようにロランは、「ああ、東は東、西は西、この二つが交わることはない」と慨嘆したイギリスの詩人キップリング（一八六五—一九三六）と同時代に生きながら、自らの内深くにインド精神の最もすぐれたものとの一体感を見出し

ていたのです。彼は国境や肌色や宗教・文化の相違を超えて、人間の魂の最も深いところで、人間性の一つであるとの信念を、体験的に生きた人でした。

初めに申しましたように、二十一世紀の人類には、ヨーロッパが今世紀の苦汁に満ちた歴史のなかから生み出したEUという国境を超えた共同体を一つのモデルとし、あるいはそれを足がかりとして、全世界の民族が平和・共存に向かつて努力する以外に生き残る道はないと、だれもが痛感しています。しかし、その努力は、たんなる政治や経済の組織作りに終わらず、民族相互の精神の理解、さらには一致の共感にいたってこそ、初めて実現できること、それがロマン・ロランの二十一世紀への生きたメッセージなのです。

なお本日は、残念ながらガンディー伝の内容と、『生きたインドの神秘思想と行動』三巻についてお話しするには至りませんが、またの機会に譲らせていただきます。ありがとうございました。

(名城大学教授、近現代インド思想・文学)

ロマン・ロラン 『最後の扉の敷居で』から

村上光彦

本誌前号で、この本の簡単な紹介を試みた。本号から、すこしずつその内容を語ってゆくことにする。標題にいう『最後の扉』とは、この世での生を終えて未知の彼岸へ踏み込むときに押し開ける扉を意味する。副題に『往復書簡』と日記断章（一九三六年—一九四四年）とあることから推察していただければよいが、ここには第二次世界大戦前夜から『解放』に至る時期にロマン・ロランが辿った、『最後の扉』を目指しての『内面の旅路』が記録されている。手紙と日記とを素材として構成してあるだけに、ロランの内心の奥の奥で繰り広げられた格闘が読者の心にじかに伝わってくる。

かつて姥原徳夫先生は「ロマン・ロランの神の理念」（姥原徳夫著『ロマン・ロラン研究』一九八一年、第三文明社刊行、所収）と題する論文を、「ロマン・ロランはいわゆる宗教家ではなかったが、神の理念を真の意味で生ききったことで、最も宗教的な人であったと言うべきであろう」と結ばれた。『最後の扉の敷居で』は、この宗教的な魂の真髄に触れることのできる書物だ。そこに立ち入るに先立ち、まずロランの宗教観を思い起こそう。その根幹は早くもエコール・ノルマル・シュペリール在学中に形成され、生涯をつうじて揺るがなかったといえよう。二十二歳の学生がこの根本問題に立ち向かって書いた体系的論述、すなわち『真であるがゆえに私は信じる』がそれだ。姥原先生はこの論文から、ロランが若き日に『神』について抱懐した思想の主要部分を示された。それをさらにこう要約してみよう。

「神とは世界を包含する無限の単一性（統一）である。神はすべてのものであり、また至るところに遍在する。神はすべての感覚であり、もろもろの感覚のすべての総合である。」「……」すべての感覚群にはそれ自身の意識、すなわち「私」の意識がある。「……」それがふつうわれわれの言う自我であり、個人的なものである。「……」自我を感じる感覚はいつも確認される。そして、神はすべてのものであるから、この感覚も神でなければならぬ。ゆえに自我——すなわち自分自身とは神であり、神の最も明瞭な現われの一つである。私の狭い胸の中の自己意識の底に、神聖な自我すなわち絶対の私が眠っている」（蜷原訳による）。

要するに、〈神〉とは宇宙万物にほかならず、宇宙の一部である自我もそのまま〈神〉なのだ。この考え方から連想されるのは、インドのウパニシャッド哲学の中核をなす《梵我一如》の思想だ。《梵我一如》とは「宇宙の根本原理（梵）と個人の中心本質とが同一不二であること」（『大辞典』一九三六年、平凡社刊）をいう。サンスクリット語で言うなら、ブラフマンとアートマンとが同一であることをいう。ロランの愛読者は『魅せられたる魂』の根底をなすインド思想のことを記憶しておられよう。蜷原先生の「ロマン・ロランとインド思想」（前掲書所収）にはこうある。「過去のインドにおける最大の哲学者と称せられるシャンカラは「……」宇宙の原理的な一者はブラフマンであり、現象界はその一者の仮象的な顕現にすぎない、と説く。そしてその顕現こそマヤー（幻像）であり、人間が現象界に執着しがちであるのは、人間本来の属性の一つである無明のためである」と。

ところで、ロランは前述の「真であるがゆえに私は信じる」のなかですでに〈幻像〉「マヤー」という語を使っている。おそらくロランは学生時代にインド古代哲学に親近感を覚え、《梵我一如》の理を彼の世界観に組み込んだのではなからうか。

ロランとインドとの結縁の深さは周知のことだ。それはいつ始まったのか。蜷原先生はロランの『インド日記』にもとづいて、一九一五年にロンドン在住のインド人学者から論文を献呈されたのが〈インドとの具体的な最初の接

触)だとしておられる。筆者の感じでは、ロランの学生時代に、すでにその素地が養われていたのではないかと思われる。いずれ森本達雄さんのご教示を得たい。とにかく、ロランは幼いころからカトリックの環境で育った人なのに、青年時代にはもうキリスト教以外の文化圏の宗教観にも心を開いていた。そのことを念頭に置いたうえで、彼の生涯の最終段階における精神ドラマを追跡したい。

もう本論に入ろう。この本の冒頭には編者ベルナル・デュシャトレ氏による優れた序論が置かれている。そのなかで、編者はロマン・ロランと〈神〉、キリスト、〈教会〉との関わりを追求している。ロランは少年時代にパリに来てから信仰を失ったとはいえ、彼自身の母親に代表されるような、純一なカトリック信者の信仰までも冷たい目で見ただけではない。一八九八年の日記には、ほかの数々の信仰と同じく、カトリックの信仰も好きだとある。ただ、司祭たちも反司祭勢力も〈神〉に制限を加えていると見て、若きロランは信者が自力で〈神〉を感じとろうとしない傾向に飽きたらぬ思いをしていた。つまり若いころから、現実社会における〈教会〉、その司祭たち、信者たちのありようを見てしっくりしない気持ちを抱いていた。彼はこう記した。「ぼくの信仰は仲介者、命令、制限を欲しない。自由で、生きている信仰なのだ」。この若き日の決意表明には、いかにもロランらしい精神の独立が明瞭にあらわれている。

ロランが『ジャン・クリストフ』と取り組んでいた時期は、レオ十三世のあとを受けてピオ十世が教皇の位に就いたころだった。フランスでは政教分離が進み、修道会の勢力がそがれ、小学校での非宗教的教育が推進されていた。十九世紀の科学技術の発達にともなって、進化論など〈教育〉にとって不都合な唯物論的傾向が勢力を広げていた。この逆風のなかで、デュシャトレ氏によれば、教皇は教義を堅持するためにつぎつぎと禁令を発した。ロランはフロイライン・エルザ宛ての手紙のなかでこう書いている。「ピオ十世のあのおぞましい〈教会〉は、いっさいの知的優越を蛇蝎視しています。みずからの党派内のことであってさえです。〈教会〉はもっとも過激な社会主義よりも、さ

らにいつそう平準化をこととしているのです。めいめいと啼いて、おとなしく言うことをきく家畜の群れが望みなのです」。

もっとも一九〇八年の日記に、オーストリアのシェーンブルンで休暇を過ごしたとき、同宿のカトリック神父たちが『ジャンニクリストフ』を熱心に読んでいるのに気づいたことが記されている。当時のロランはというと、司祭たちは彼の仕事に無関心だったり、それどころか敵意を抱いているものと思っていた。自分の本を読む神父たちに接して、あながちそうとばかりは言えないのがわかって、彼は日記に記した。「打ち明けて言うと、彼らにわかってもらえたと感じて嬉しくなった。それというのも——彼らがぼくを理解する気になってくれたらのことだが——ぼくを完全に理解しつくしてくれるのは彼らだけだからだ」。カトリックの信仰に幼いころから親しんできただけに、彼はみづからの宗教観にいちばん近いのがカトリックなのを痛切に感じていた。これは双方から歩み寄った時期で、神父たちのあいだにも、彼が〈真と善とに向かう意志〉の持ち主なのを見てとる人たちが出てきた。

もっとも、こうして一時期、カトリックの神父たちに期待を抱くことができたものの、第一次世界大戦が勃発し、彼が万人に対抗して平和を守り抜こうとしたとき、ほかの知的勢力と同じく〈教会〉もまた彼を突き放した。一九一七年十月に、ロランは友人にこう書き送った。

「わたしについて言えば、こんどの戦争中のキリスト教徒は、わたしを永久にキリスト教から引き離してしまいました。将来いかなる修復が行われようとも、福音書はその信奉者たちの手で血塗られてしまったのですから、その血の染みが洗い流されることはないでしょう。新時代には新しい聖書が必要です……」

大戦を契機として、ロランは社会参加の姿勢を強めた。だが、彼はけっして党派の人ではなかった。彼はどの党派にたいしても批判の目を向けた。『内面の旅路』にこうある。「社会主義者（わたしはなんらその仲間ではないが）にたいしては彼らが見ずからの大義を裏切っているということを、その一方キリスト教徒にたいしては「……」彼らが

みずからの〈神〉を裏切っているということを出させるのが「……」わたしの役割だったのであろうか」。このあとにつづけて、編者はロランが一九一四年十一月十日に若い友人のひとりマルセル・マルティネに書き送った手紙から以下の数行を抜き出している。「四福音書と、キリストおよび使徒たちの物語とを「……」注意深く読み返してみた」。編者によれば、ロランはこのとき福音書を読んだおかげで〈キリストを再発見「それとも発見？」した〉のだという。また『戦時の日記』には、ロランが名前だけのキリスト教徒を排撃して、自分は〈福音書のキリスト教徒〉の仲間だと書いている箇所があるという。そればかりか、ロランは〈キリストの大義〉を〈われわれの大義〉だとも語っているという。一九一七年二月には新教の牧師に答えてこう言いきっているのだ。「わたしは、おつとめや信仰の点ではキリスト教徒ではありません。キリストの英雄的で善良な魂に接すると、打ち勝ちがたく感嘆と愛とが湧いてまいります。わたしは〈キリスト教徒〉という肩書きよりは〈人間的〉という肩書きのほうが大切だと思っています。簡明に申し上げますが、キリストの教義が非人間的な思考を是認しているのなら、わたしは永久にそこから離れます」。

デュシャトレ氏はロランとキリストとの関わりを要約してこう記している。「彼は、自分がやはりキリストに忠実なのであって、キリストの弟子なのだと思っている。キリストは〈神〉ではないとしても、おそらくは人間の最適なところを最高度にまで高めた〈人間〉なのである。彼は〈いのち〉の〈光〉なのである」。

ロラン自身、この見方を若い友人のひとり、アルフォンス・ド・シャトールブリアンに向かって明言している。「わたしはキリストが神だとは信じないのです。おそらく彼はその内面に、もっとも偉大な人々以上に〈神的なるもの〉を宿してはいたでしょう。しかし、彼は人間でした」と。彼はキリストに親しみを覚えつつも、党派としての〈教会〉を嫌っていたのだ。

編者はさらに、東西に橋を架けようと試み、民族・人種・宗教を越えて善意の人々を結集しようと念願したロラン

に目を向ける。「ラーマクリシュナの生涯」は「〈神〉の水路を通過して人類の一致が実現されるように」との念願から書かれた。編者はこの本につきの数行を見いだしている。「キリストについて語られた『彼は世の終わりまで臨終の苦悶のうちにあるであろう』という悲劇的なことは「パスカルが『パンセ』において語ったことば』はよく知られている……。わたしはというと〈人格神〉を信じない。とりわけ〈苦悩〉のみの〈神〉を信じない。しかしわたしは信するのだが「……」人間のなかに、また人間たちのなかに、また宇宙のなかに不断に生まれ出てやまないものを除くには、〈神〉はないのである。〈創造〉は一瞬ごとに更新される。宗教はけっして完結した業ではない。それは休むことなく行動する行為にして意志である。それは湧き立つ泉である。断じて池ではない。彼は同じ本のなかで、ヴィヴェカーナンダのつぎのことを引用している。「もし〈神〉を見いだしたかったら人間に奉仕したまえ！」

ロマン・ロランが戦間期にともにファシズムと戦うために共産主義に接近し、スターリン支配下のソヴェート・ロシアを訪れさえしたのは、ひとえに「人間に奉仕する」ためだった。だが、現地でスターリニズムの実態を見抜いたロランは、革命が愛徳とまったくかけ離れてしまっているのを認めざるをえなかった。やがてスターリンが独ソ不可侵条約を締結してナチス・ドイツとともにポーランド分割の暴挙に出たのを見たとき、ロランは幻滅を覚え、彼の社会参加が失敗に終わったのを確認した。デュシャトトレ氏は彼の心境を一言で表現している。「参加からの離脱を告げる時の鐘が鳴り響いた」。ロラン自身のことばで言えば、「わたしについてはおしまいだ！」「……」大いなる幻影の究極の局面は閉ざされた。わたしは〈行動〉の圏外に出た」とある。

彼はこれより先、一九二四年から一九二六年にかけて大病にかかり、みずからの人生の終わりが近づいているように思っ「内面の旅路」を書いた。同書には「敷居」と題した章があり、それは死に神が扉のかたわらで待っている幻視から始まっている。

そして十年後には、いま述べたとおり彼の社会参加の破綻が始まろうとしていた。ところでデュシャトトレ氏の指摘

によると、まさにこの時期に、カトリック教会が変貌しつつあった。彼は宗教書を何冊も読んで、カトリシズムの新潮流に気づいた。晩年の大著『ペギー』を書くために恩寵の問題を熟考した時期でもあった。そのような事情も手伝って、『教会』にたいして以前に抱いていた先入観のいくらかは薄れていった。そういう状況のなかで、神父たちや修道士たちのなかからロランにはたつきかける人々が出てきた。ロランのほうもこれに誠実に応じた。デュシャトレ氏は曲がり角に立つロランをこう描いている。

「このようにしてR・ロランは、いっさいの幻想を剥ぎ取られ、アネットが死の敷居際に来ていたときのように『幻滅』を覚えて、ヴェズレーに来ていた。この人は年老いていた。われとわが人生を振り返り、『回想記』の仕上げにかかり、そして周航の終点にさしかかって、自分自身の内面を明瞭に見定めようとした。そしてまわりにいた人たちのおかげで、彼はカトリシズムが若返っているのを発見した」。

*

本文は、パリ・カトリック学院神学校で学んでいた神学生のレーモン・ピシャルが、一九三六年五月一日にロマン・ロランに宛てて書き送った手紙から始まっている。「この手紙がお手元に届くかどうかかわかりませんが」という書き出しからは若者の不安な気持ち伝わってくる。神学生の身分で、ひそかに尊敬してきた作家に手紙を書いて、さてそれが期待どおり相手に読んでもらえるのかどうか。自分が若かったころを振り返るとき、同じような気分になったことがあると思つて感慨にふけらずにはいられない。彼は『ジャンクリストフ』を読み終えたばかりだった。「これほど美しい作品を読んだことは、ずいぶん久しくありません」と、彼は書いている。彼がまず取り上げた場面は、ジャンクリストフがレオンハルト少年と話しあっているうちに〈神〉への信仰を失っていたのに気づく場面だ。レ

オンハルト少年の姿にも、二人の少年が話し合った話題にも、彼の心のなかで《ごく明確な思い出》と響き合うものがあつたのだ。そのうえで、彼はこの年ごろの少年には理想を言語化することはできないのだ、と述べている。胸のうちの思いをだれかに伝えたくても、その思念に遙かに及ばない、無価値なことばしか浮かんでこないからだという。しかし、キリスト教の信仰の埒外にあるべくなどから見ると、信仰のある者となし者とは、この段階ですでに大きく隔たつてしまうようだ。信ずる者にあつては、たとえそれがことばに言い表しがたくとも、胸の奥の見えない泉から神への思いが湧いてくる。これにたいして、そもそもその思いがなければ、ことばで言い表せるのは神の不在という感じでしかあるまい。ピシャルとロランとの文通は後者が世を去る一九四四年まで続くのだが、信ずる者と信じられない者との懸隔は、本質的には最初から最後まで縮まることはない。

では、それが縮まらなかつたからにはこの文通は無意味だったのかというと、けつしてそうは言えない。信仰の次元では一致できなかったとしても、ピシャルを初めロランに接近した修道士や神父たちとロランとのあいだには、人間どうしのじつに豊かな心の通いあいが見られるからだ。

さて、若き神学生はこの最初の手紙のなかで、ジャン・クリストフがフランスに來ながら真のカトリシズムに出会わないでしまったことを残念がる。彼はオリヴィエに同調して、「一国を判断するには疑似選良をもってしてはならない……一国民の生命は地下を流れる川のように注意を引かずに流れる」と語っている。彼に言わせれば、ジャン・クリストフがフランスで出会つたのが《疑似カトリック》でしかなかつたのは残念なことなのだ。彼はこう述べる。「カトリシズムがいかなるものかを知るためには、その枢機卿たち、そのブルジョワたちにそんなことを尋ねてはなりません。《カトリック教会》がみずからそうあらんと欲する姿を《代表する典型》として公認している人たちがすなわち聖人たちを見なくてはなりません」。彼はジャンヌ・ダルク以下、数々の聖人を列挙してから、それらの聖人がジャン・クリストフと同じ性質の持ち主だった、とまで語っている。「ジャン・クリストフは、もし彼らの環境で、

すなわち彼らの《教会》で暮らしたのであれば、彼らと同じ人生觀を体得したことでしょう」と。突きつめれば、ジャンクリストフは聖人でありえたはずだ、と言いたげだ。

ロマン・ロランはスイスのヴォー県、ヴィルヌーヴの居宅ヴィラ・オルガから、折り返し五月十日付でピシヤールに心のこもった返事を書いている。その主要部分をそのまま紹介しよう。

「あなたの語っておられる聖なる魂たちのことをわたしは認めていないなどは、お考えにならないで下さい！

わたしはそれらの魂を尊び、愛しております。純粹で誠実な、すべての偉大な信者を尊び、また愛しているのと同様にです——（おそらくいつかは、現代インドの神秘家たちであるラーマクリシュナとヴィヴェカーナンダについての、またキリスト教の偉大な神秘神学と彼らとの関係についての、わたしの本をお読みいただけるでしょう。彼らのことで、わたしはブレモン神父（アンリ・ブレモン神父（一八六五—一九三三））。宗教感情を軸とした文学史、純粹詩をめぐる詩論などが有名」と文通したことがあります。——わたしの存在の根底は宗教的なのです。ただし、《大洋的》とでも名づけられるような意味においては、しかしそれはなんら宗教ではありません。宗教への欲求でさえないのです。

それでいて、わたしはフランスの地方のカトリック的環境の出身者として、敬虔な教育を受けた者です。そしてわたしが愛してやまなかった母はたいそう信仰が厚かったのです……。

なにごとにつけ、あなたを悲しませたくはありません。しかし、今日生きている多くの魂たち——わたしが申し上げているのは、誠実そのものの《観念論者たち》、すなわち《神》をも個々人の不死をも信ずる必要のない人たちのことですが——の内面で起こった大変動のことを、おそらくおわかりでないでしょう。この人たちは、宇宙の謎ということを認めることさえ断念しています。彼らには、自分たちが存在し、また行動するために、自分たちは知っていると思う必要などないのです。真実の公正な探究が永遠に終わらず、自分たちがけっしてそこに近づくことがな

いことに、彼らは《宗教的な気持ちで》甘んじているのです。これが真の科学の宿命です。そこには誇らかて忍耐強い謙虚さが、精神の根底からの全き自己放棄が含まれています。それが秘められた喜びを伴っていないとは言えませんが、それもそれなりの仕方です。《宗教的》なのです。

まさに同じ精神が、わたしたちを社会的行動へと導くのです。わたしたちは社会の《最善》のために努めているのですが、《最善》といっても相対的だということをちゃんと承知しています。わたしたちは地上の楽園を夢見てはおりません。ただわたしたちは、あしたがいよいよ不正が少なくなるよう、あしたがこの先ずっとより《人間的》になってゆくようにと願っているのです。行路は険しいのですが、いっそう明るい光へ向かって登ってゆきます。そして今日、あらゆる国々の何百、何千万という同胞のために、行く手が開かれています。光は彼らの目によって幾層倍にもなって、そこからわたしたちのほうへ戻ってきます。——これもまた《変容》ではないでしょうか。

(成蹊大学名誉教授・仏文学)

「愚鈍」の小詞華集

村上光彦 訳

「ウーロップ」誌（一九二三年に、ロマン・ロランとその友人たちが創刊した雑誌）第三十八号（一九二六年二月十五日刊）は、ロラン生誕六十年を記念した特集号である。そこにはロランへの敬愛の証として数々の文章が寄せられたが、編集者はこれに別種の一群の発言を付け加えることを思いついた。この部分の採録を担当したジャン・ボヌローはその意図を以下のように述べている。

「以上の非常に多くの友好的な寄稿のあとを受けて、ロマン・ロランの生涯と作品とを目がけて投げつけられたなかで、とびつきり愚鈍な、また憎々しくも銜学趣味をひけらかした文章を選び出して標本として示しておけば、なにかの参考になろう。いや必要である。虚偽、卑劣、偽善的な自己過信といったものは、ここで特別席に迎えるのにふさわしい。あの狂愚の時期には、分別のある人でも大部分がこんな具合のばかげた文章を平気で印刷に回した。あのような時期の思い出がなくなってしまうように、これらのばかげた発言のこだまを集めておくのは正当なことなのである。せめてこれが、病理学上の証言ともなり、人間が不公平になるものだという教訓ともなってくれればと思う。」

+++++

全人類がR・ロラン氏の理想を嘲っている。

アンリ・マシス

〔フランスに敵対するロマン・ロラン〕一九一五年〕

訳注 マシス（一八八六—一九七〇）はフランスの右翼的評論家でアクション・フランセーズ系の

論客。マシスのこの小冊子には、ロランがジュネーヴで発表した「戦いを超えて」が再録されている。当時、フランス政府はロランの論説をフランスで発表することを許さず、それらの文章が人目に触れるときには、かならず削除や悪意による変改が加えられていた。フランス国内の読者は、マシスの引用のおかげでロランの真意を知るといふ皮肉な結果となった。

*

ロマン・ロラン氏は、曖昧でみだらな表現に秀でている。ここでそのむね特筆大書しておこう。そうすれば繰り返す面倒が省ける……。彼はまず第一に里程標の位置をずらす男である。彼は、神・道徳・美德の聖なる砦を奪い去りたがって、なんのかのと逃げ口上を述べ立てているから、われわれは彼のそうした口上を告発する。彼の取り巻き連中は、のんだくれては「われに罪あり」と唱えて胸を叩く乱暴者や、賛美歌をわめき散らす高等娼婦どもであり、彼はそんな手合いといっしょに、ヤンセニウス派の旅券を手にして〈神殿〉に入り込もうとする。こういう粗野なやり口にたいして、われわれは怒りを発するのである。われわれはいま立ち上がって、彼の攻撃を押し返し、そして彼をその古巣である泥に漬かった領土に押し込めて二度と出られないようにしてやる。

【ル・レトル】紙、一九一四年六月十五日

*

ああ！ ビベルシュタイン、ウンルー、クライン。これらの人たちこそ、ロラン氏を理解するのに向いている。だが、彼らは死んだ。それにおそらく彼らはこの世にいたことなどなかったのではないか……。

ウンルーというのがいる。チューリヒのある新聞に、ウンルー槍騎兵中尉の詩や散文が発表されたことがある。この恐るべき戦士は、そのなかでドイツ軍の塹壕のありさまを描き出した。そこでは男たちが寒さと飢えに死んでゆき、そのかたわらで将校たちはシャンペンに酔いしれていると、彼らを呪ったものだ。ロマン派なのである。さてロラン氏は、そいつが反ドイツ的で、はっきりと平和主義者だと請け合っているが、そのとおり信じなくてはいけないのか。そもそも、ウンルーなる者はいらぬのか。そのウンルーは、チューリヒの新聞記者のでっち上げた、死んで生まれた私生児かなにかではないのか。彼はチューリヒの記者に騙されたのではないのか。ロラン氏は無邪気で、生まれたてのヌヴェール地方人のようにお人好しときている。だから彼は、前へ前へとまっすぐに敵を作って、それでよしとしてしまう。ウンルーというお皿を出されると、彼はウンルーを生のまま食べてしまう。おそらく、ロラン氏は芸術批評には秀でていようが、批評精神に欠けるところがある——それも並大抵の欠け方でなく！

アカデミー・フランセーズ会員、フレデリック・マゾン

【ル・ゴローワ】紙、一九一五年八月二十四日付

訳注 フリッツ・フォン・ウンルー（一八八五年生まれ）はドイツの詩人。將軍の息子であり、彼

自身將校であったが、第一次世界大戦勃発後は平和主義、国際主義、諸国民間の親善へと傾斜していった。ヴェルダンの戦闘のあとで書いた「犠牲への歩み」という長詩、「ある家族」（一九一六）や、「広場」（一九二〇）などの劇作もある。ナチス台頭後米国に亡命し、帰国後は数編の長編小説を書いた。

*

彼の文学たるや、不運を賛美し、墮胎をほめたたえ、災害を栄光で飾り、完敗を満艦飾で祝い、しくじりを崇め奉るといったものである。この見地からすると、ミケランジェロおよびベートーヴェンについて彼が書いた本は特徴がよく出ている。心底こういう印象を受けるのだが、二人の巨大な老落後者の伝記を読まされたという感じがする。

アルベール・ギノン

〔ル・ゴロー〕紙、一九二五年八月七日付

*

ロマン・ロラン氏が多産なことなら、だれも疑ってかかったためしがない。彼がジャン・クリストフをロカンポールよろしく生き返らせて、あとまた十巻を費やして、この人物を戦場から戦場へと経巡らせようと企てなかったとはどういうわけかと、驚いてもよいくらいである。いつものことであるが、彼の長編小説は年末なり時代の終わりなり

に上演されるレビューに似たところがある……

ポール・スーデー

『ル・タン』紙、一九二〇年十月二十四日付

訳注1 ロカンポールは十九世紀後半にフランスで人気を博した大衆作家ボンソン・デュ・テライ

ユ（一八二九—一八七二）の創造した、信じたいほどの冒険を重ねる主人公。

2 スーデー（一九六九—一九二九）は文芸評論家。一九一二年以来、『ル・タン』紙の文芸欄を担当した。

*

いつかガリアの雄鶏の歌声が鳴り響くとき、このペテロは目を覚ますであろうか。彼はオリーヴの園でみずからの主イエスがわからなくなつて、かの北方の松林に逃げ込んでゆき、「生きんと欲するものは生きなくてはならない」などと言っているのだが。ロマン・ロラン氏は、これからまだいつまでドイツ人になつたままである気であろうか……

アンドレ・モーレル

『メルキュール・ド・フランス』誌、一九一七年

*

おそらくロマン・ロラン氏ただひとり、彼の国際的愛国心を奉じつつ、ドイツ文明が血氣盛んな連中「アルジェリア現地人騎兵」によってさんざんな目にあわされているので屈辱を覚えてゐる。なにぶんにも連中は、彼の石膏のように白っぽい文体と比べたら、じっさい色調が少々鮮やかだときているし……。実のところ、わたしはロマン・ロラン氏をなんら軽視してはいない。氏の名前が念頭に浮かんだのは、じつに暗示に満ちた戦争画の小品を見てのことである。彼がもっと立派な文章を書きさえすれば、彼のために推薦に値する作家のあいだに席を設けてやっただけでいい、とさえ思っている。それにしてもアルジェリア現地人騎兵がゲルマン民族の敗北者を——ひよっとすると、おそらくジャンクリストフその人を——縄で縛って引っ張り回している場面に、彼が思いをひそめてくれないものか。

レミ・ド・グールモン

〔ラ・フランス〕紙、一九一四年十一月八日付、「勝ち誇る現地人騎兵」

*

トルストイ主義はいけない、そうでなく聖書主義、仮借ない聖書主義を。

レミ・ド・グールモン

〔ラ・フランス〕紙、一九一五年三月十四日付、「人質」

*

この優れた作家については、すでにすべてが言いつくされました。彼の心理学、感性、完璧な形式は、正しい道徳

的感覚を犠牲にして発達したように思われます。なぜかという、彼は死刑執行人と犠牲との区別をつけることができず、芸術に奉仕することしかできないと信じてフランスに不為なことをしたのでありますから。

ファラリク

司法委員会の一員として加わった警視

〔有名裁判事件評論〕、一九一九年三月二十三日付——ギルボー裁判、第三回軍法会議における、一九一八年二月八日付の報告書。〕

訳注

アンリ・ギルボーについては、ロマン・ロラン『戦時の日記』の随所にその名が出てくるので参照されたい。第一次世界大戦末期に、彼はスイスで対独通謀の嫌疑を受け、裁判にかけられた。彼が同地で創刊した反戦雑誌『ドマン』は、のちに小牧近江が『種蒔く人』を創刊したときに参考にしたものである（本誌第二十六号所載の柏倉康夫氏による「ロマン・ロランと『種蒔く人』参照」）。

*

……わが国の文学全部のなかで、ドイツで書いたらいちばん容易に書けそうに思える本、それは『ジャン・クリストフ』である。たぶんそのために、あの本はライン河のかなたで成功を収めたのである。

アンドレ・ジード

〔ヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズ〕誌、一九一九年六月一日号——「ドイツについての省察」

彼の書物（『ジャンクリストフ』）は、翻訳して初めて本物より上等に見えてくる。もっと突っ込んで言おう。フランスが惨禍に遭って初めて、それは得をする。フランス語がなくなり、フランス芸術もフランス趣味もなくなってしまうとき、また彼のほうでも否認し、世人が彼にそれがあると認めない、そう言った類のフランス独特の資質の一切がなくなってしまうとき、それは初めて得をする。フランスが究極の惨禍に遭ったら、彼の『ジャンクリストフ』は、その最大かつ決定的な重要性を付与されることであろう。（書いたのは一九一七年）

アンドレ・ジード

【ヌーヴェル・ルヴュ・フランセーズ】誌、一九一九年七月一日号——「日付なき日記」

*

さあさあ、親愛にして興味深き同僚よ、きみは運命のもっとも不思議な皮肉ゆえに、比類なき勇者の名を名乗っておいでだが、われわれはつねづねこう疑っておりました。『ジャンクリストフ』の売れゆきは、パリでよりライプツィヒでのほうが儲けがあったのではないか、と！　こんどこそ、もう疑う余地はありませんな！　……そうとも、きみは今世紀初頭の、かの美貌のタルテュフではないか……きみの仮面を剥ぐにはえらくひまが要ったものです。それにわたしはしかと承知していますが、これからもずっと愚か者やら共犯者やらが何人か生き残っていて、きみを褒め上げたり気の毒がったりすることでしょうて！　われわれのからだの髓まで食い込んでいる悪性腫瘍のように、平和主義的国际主義は枝分かれしながらしぶとく根を張っています。しかしともあれ、いまや、メスが初めて突き刺されたのです……

ポール・フラ

〔ルヴェ・ブルー〕誌、一九一六年三月二十五日—四月八日付—「ロマン・ロランとその一団」

訳注　〔比類なき勇者〕とはシャルルマーニュ皇帝伝説のひとつ「ロランの歌」の主人公ロランを

指す。ロランは皇帝の甥で、ブルターニュ辺境領伯爵であったが、七七八年にサラセン軍と戦ったさい、護衛軍部隊を率いて壮烈な戦死を遂げた。

*

ロマン・ロランは非常に気高い性格の持ち主である。しかし彼は道德的にこわばっているために、フランスの国民感情を逆撫でせぬために必要不可欠な柔軟性を欠いているようだ……。フランス国民はあらゆる調査を大目に見るし、もっとも苛烈な論告にも耳を貸す用意がある。ただしそれは、検察官に暖かさや理性が備わっていて、それを見れば彼の出身が察せられるばあいに限ってのことだ……

モーリス・マルタン・デュ・ガール

〔ヌーヴェル・リテレル〕紙、一九二五年二月二十一日付—「ロマン・ロラン訪問」

*

今日の時点にあつては、平和を欲する者は戦争を欲する……。こういう時期があるのだ……人類のもっとも貴重な宝を守り抜くためには、ルベル式連発銃の引き金に手をかけつつ、われとわが胸を危険にさらす文盲の男の行為のほ

うが、要所要所でいかにもものやわらかな溜息をつけて見せつつ、雄弁このうえなしに述べ立てる説教よりも重要性を帯びる時期が、である。

ジュール・ド・ゴージェ

〔ラ・ルヴュ・ド・オランダ〕誌、一九一六年二月号——「ロマン・ロラン氏とイデオロギー信仰」

*

かくも多くのむごたらしい思い出が消えやらずにいるのだから、われわれの憎しみを燃え立たせているものがどこにあるのか、あなたにもおわかりと思う！

この憎しみが不意に立ち消えになることなど、われわれが突然の記憶喪失に襲われられない限りありはしない。それとも、ロマン・ロラン氏に奇跡を行うことができ、エンベドクレスさながら死者を生き返らせることができないう限り。

フェルナン・ヴァンデレーム

〔ル・フィガロ〕紙、一九一六年二月四日付——「思い出を超えて」

*

本題から逸れるが、今次大戦中に「ジュールナル・ド・ジュネーヴ」紙に載った論説のうち、フランス国民にとって不愉快に思えた文章といたら、あるフランス人が署名したものだだけだったというのは、奇妙なことではある。

ピエール・ド・キリエル

〔ル・コレスポンダン〕紙、一九一五年八月十日付——「ロマン・ロラン氏の幻滅」

*

あなたならではの好みの言い方で、この論戦にさいしてご自分の〈成功〉を犠牲にしたと語っておいでですね。それはすな、すくなくとも大抵の者から見れば、ご自分を鼻にかけた言い方ですぞ。あらゆる人々を叱りつける人物を〈公平〉だと思ってしまう手合いとか、また独断的表現様式で語られた気分を〈思想〉だと取り違えてしまう手合いは別としてのことですがね。そういう手合いはあなたの味方ですよ。彼らは、心情が衰えたさまや、やたらに胸のうちを打ち明けたがる癖や、確固たる態度をいやがる癖のことを美德と名づけるのですが。さいごに、だいいじなものを持ち合わせていない連中が——力を、才能を、美を持ち合わせていない連中が——闘争が論難され、勝利が論難されるのが好きで、そんな様子を見ると、永遠の敗北者という自分たちの境遇の仕返しをしてもらえたように喜んでしまう連中が、こぞってあなたの味方でありつづけるのです。そうした手合いにとっては、あなたの新作は神聖です。あなたの旧作と同じに、またそれにもまして。まあ、諦めなされ。あなたの〈成功〉はいつまでも頑健です。

ジュリヤン・バンド

〔「ロビニオン」紙、一九一六年二月十九日付——ロマン・ロラン氏への公開状〕

訳注 バンダ（一八六七—一九五六）はフランスの評論家。「知識人の背任」（一九二七）が有名。

*

マシス氏は、カトリックではあるが——当人なら、カトリックだからこそ、と言うであらうが——当代のもっともきっぱりとした、もっとも繊細な、そしてもっとも蓄積豊かな精神のひとりであり、モンテーニュ流に言えばもっとも（出来の良い）頭脳のひとりである。そしておそらくまだ激しく震えてやまない文体にもかかわらず、ロマン・ロラン氏とはまるきり別の作家である……

……ロマン・ロラン氏を作家だと取り違えたりするのは、けしからぬ、また危険なことである。なおその点については、当人よりも彼の忠実な読者に責任があると思う。それというのも、彼は結局、自分にできることをしなくてはならないのだから。

……ペギーは三人か四人、文学上の目利き違いをしたが、ロマン・ロラン氏はそのひとりであった。

……だからして、ロマン・ロラン氏はわたしには国民的な危険に見える。大戦という大変動のために彼は中立的な立場に置かれているが、おかげで彼を偶像視していた人たちにも、より健全な視座のなかに彼を握えることができた人がいるわけで、このことはこの大変動の副次的な結果のひとつ、それも好ましい結果なのである。

ゴンザグ・トリュック

（『グランド・ルヴュ』誌、一九一五年十二月号）

*

この本『クレランボー』のなかで、著者は物語を語る代わりに、いつものデーモンに逆らいきれなかった。彼は本を書くごとに、このデーモンにそのかされて、象徴的な木偶の坊をばかでかい風船のように膨らませてきた。その木偶の坊は、あるときはジャン・クリストフ、またあるときはコラ・ブルニョン、ペーターヴェン、ミケランジェ

ロ、クレランボーと呼ばれている。

アンドレ・テリーヴ

〔ラ・ルヴュ・クリティック・デ・ジデー・エ・デ・リーヴル〕誌、一九二〇年十二月十日号

*

彼は平和を説いた者として、「殺せ！ やっつけろ！」と叫びたくはない。ところが、ドイツ野郎どもがこの叫びを發した。思うに、こうした素朴な考えを後生大事に持ちつづけなくても《知識人》でいられるはずだ。ものすごい突風が吹きまくって、ユートピアはことごとく掃き捨てられてしまった。こうした考えも掃き捨てられたうちに入る。それにしても、過去の人とはいえ、気高く、また誠意に満ちた人に石を投げつけるとはどういうわけだ。世人がしてよいのは、せいぜい皮肉っぽく双眼鏡を差し出し、焼きつくされた大聖堂とか、惨殺された少女とかの写真を見せてやって、こう言い聞かせるくらいだろう。「お人好しですね、まあこれをよっくらんになっってください。それから、ご自分を振り返ってごらんください」と。

カミーユ・モークレール

〔ル・プティ・ニソワ〕紙、一九一五年五月十七日付——「あるばあい」

訳注

カミーユ・モークレール（一八七二—一九四五）はフランスの作家。詩人、小説家、評論家、美術史家として多方面にわたり才能を發揮した。

*

違うよ、アンリ・マルクス。ロマン・ロランの態度は《人間の名誉そのもの》なんてものではなかったよ。彼はま
ず自分がフランス人なのを示すべきだった。この作家は公民としての裁きをうけるいわれがないなどときみが主張し
たりするんで、ぼくは笑ってしまう。彼は裁きを《甘受》すべきか、またおそらく世人は《あえて》彼を裁く気なの
かと、きみは叫んでいるね。いやはや！ この文士が友愛を説いているからといって、彼は侵すべからざる、普通法
を超越した存在なんだろうか。フランス人ならだれでも、俳優であっても、彼に嫌悪感を見せつけることを禁じられ
るんだらうか。そんなことをしたら、モリエールの家にごく丁寧に迎え入れられている作家から、《フランス精神
の田園監視人》扱いされても仕方ないんだらうか。でもじつのところ、この田園監視人だが、そいつが大馬鹿だと思
われていた時代なんてとうに過ぎ去ったんだがな。むしろこの監視人はだね、略式裁判の判決を下すにあたって、あ
の昔ながらの大地に根ざした良識に頼るんじゃないかな。こちらのほうがフランス人らしいし、ありがたそうにご託
宣よりほんとうに賢明なんだから。

ガブリエル・ボワシー

【コメディア】誌、一九二五年十二月十日付——ロマン・ロランの『ダントン』の問題)

訳注 《モリエールの家》とはコメディイ・フランセーズのこと。

*



戦争が終わったら、あなたには発言の権利はなくなるでしょう。それというのも、戦争が始まる前、あなたはどこにおられ、また公民としてどのような任務を果たしたのですか。

ポール・イヤサント・ロワゾン

〔犯罪に直面するとき、あなたがたは中立なのか〕一九一六年

（成蹊大学名誉教授・仏文学）

「文明化された野蠻」の時代に

— 映画『スペシャリスト』を観て —

小尾 俊 人

ロマン・ロランは『魅せられたる魂』全七巻（一九二二—一九三三）の完結ののちに、全集版として再版の第一巻を一九三四年に出版した。その巻頭に「作品の創造過程を語っている——一九一四年以前から——序文」（J・ケーノへの手紙、一九三四・四・一五）を置いている。ここで、彼は、作品の全体を交響曲と呼び、そのモチーフをつぎのよう

に示している。

「私はこの交響曲の最後の楽章「聖なる道」において、この作品全体の音楽的テーマを結合したいと思った。

—— 子供の幼年時代。

—— ジョルジュとコラの姪孫…シルヴィの笑い。

—— ベートーヴェンの〈苦悩によって歓喜へ〉のテーマが、この本での二人の賢者のそれぞれに転調する。その一人、ジュリアンでは〈苦悩によって真理へ〉になる。（アンネットの臨終時の言葉「苦しむことは学ぶことだ」）

他の一人、ブルノー伯の場合では、〈光クラムナによって愛へ〉に転調する。

——イリミネーションと〈懐疑〉の交錯した二つの音楽、山羊番の牧童の吹く笛と、モンテーニュの夢を覚ましたオーボエの刺繍音（注 和音の構成音を、その上部または下部二度にあって回帰的に裝飾する和音外音）

——夢（あらゆる時代のための für alle Zeit カンタータと行動（瞬間的に過去……になってゆく今日の、絶対的命令）

この交響曲はもろもろの世紀のオーケストラの演奏するコンサートである。私たちは、その断片を聴くしかない、不協和音が、まったき和音に達する前に、弦楽器の弓を、他者にひきわたす。しかしこの和音を、衝突する最初の音から、待っているのである。

いかにもせよ、この本は音楽である。私はこれを「夢」の女王、私の一生の「夢」である調和にささげる。」

（一九三四・一・一）

この三節の、ベートーヴェンの〈苦悩〉によって歓喜へ〉のテーマの、ロランによる転調の内容を見よ。「苦悩によって真理へ。」それは、主人公のアンネットの死のまぎわの言葉「苦しむことは学ぶことだ、自分の生涯のすべての苦しみは、曲り角 l'angle d'inflexion であつた」に、シンボリックに表現されている。

*

先日、映画「スペシャリスト——自覚なき殺戮者」un spécialiste を見た。

一九九九年、フランス・ドイツ・ベルギー・オーストリア・イスラエル合作、白黒で二時間以上。昨年第四十九回ベルリン国際映画祭の招待作品だったものである。

主題はイスラエルの法廷における、ナチ将校アイヒマン裁判の過程で、実写フィルム約三五〇時間分を二時間に要約編集したものの。製作の意図は、さきに封切られた『ショアー』（クロード・ランズマン監督、一九八五）とは対照的に、被害者ユダヤ人あるいはイスラエル「国家」を絶対化、あるいは無謬の前提とするものではなく、現代における人間と社会の在り方に問題を絞って示している。

監督は二人、一人はもと「国境なき医師団」の総裁だったブローマン、彼はエチオピアで政府・国家の悪への加担に直面した。他の一人はイスラエル市民でレバノン戦争に疑いを抱き、フランスに住むシヴァン。ふつうの有能な人間を殺人者に変えるものは何か？ という根本的疑問が二人に共通する。

この二人をむすびつけたのは、現代世界にびまんする悪の陳腐さ *la banalité du mal* の実感だった。ユダヤ人の哲学者ハンナ・アーレントが、アイヒマン裁判に立会って書いた『イスラエルのアイヒマン——悪の陳腐さについての報告』（一九六三）にインスパイアされた映画であることが、最初の字幕に記されている。

この本は出版当時ユダヤ人たちに猛烈な反感を呼んで、イスラエルでは、この本はもちろんのこと、彼女の著作は一切、禁書であるという。

ナチの犯罪の深刻さは絶対的で、悪の陳腐さ、凡庸さという一般性への還元は許されない、という民族感情のためであろう。

映画でアイヒマンは、組織の歯車として、オーガニゼーション・マンとして有能、実直な模範生だったことが示される。

アイヒマンは、ナチの親衛隊の将校で、ユダヤ人を強制収容所へ送る運送計画の責任者だった。彼は、ナチに忠誠を誓って行った行為であって、命令と判断は上級者のもの、自分は、その命令の実行にあたって忠実であった、任務の遂行は、宣誓に従っただけ。したがって「個人としては内的責任を感じない」という。検察官の「良心において有

罪を認めるか」の問いに、「法律的に、ではなく、人間的には」と答える。

アウシュヴィッツの大量殺人の印象について問われると、口ごもりながら「火あぶりにあう感情」と答える。

自ら、自己の性格を「勤勉であり、忠実である」と評価する。法廷で、彼は、彼の立場のアイデンティティを変えていない。法的な国家レベルで極刑に処せられることは、十分に理解しつつも。このことは、彼の置かれた立場を前提とすれば、十分に理解される。しかしそこに残るものは、良心の呵責であり、意識の分裂である。これを見た人の多くは、日本社会の「今」を蔽う、官僚社会の有り様を重ねて、イメージしたのではないかと思われる。

*

十九世紀の歴史家ヤコブ・ブルクハルトは言っている。

「近代的デモクラシーの社会では、かつてのルネサンス的普遍的人間は姿を変えて、平凡な教養人になってしまい、この「教養の世紀」（十九世紀）につづくものは、一つの「文明化された野蛮」となるであろう。平均化の行きつくところは、悲惨と前進であり、それは一定の、監督、監視下に置かれており、「毎日毎日が制服姿の、太鼓の連打にはじまり、連打で終る」ようなものである。二十世紀の安楽さのなかで、権威が「おそるべき平凡さ」で鎌首をもたげてくるだろう、〈おそるべき鎌首が〉。」（K・レーヴィット「ブルックハルト」序文参照）

まさにナチ社会、全体主義出現の予言だった。

この予言の一世紀あとの世界を、いま、アイヒマン映画で、すでに経験済みのもとして、われわれは見ているのだ。二十世紀の終末における世界の現実がこれである。対処の仕方について私はつきに、ロランの言葉を思いおこしたい。

「善も悪も拡大しなければならぬ。」これはロマン・ロランが『ジャン・クリストフ』完成のさい、ノート（一九二二年十月）に書きしるした言葉である。そのモチーフによる新しい大河小説が『魅せられたる魂』であった。二十世紀の展開につれて示された悪の拡大の現実的例証の一つが、すなわちアウシュヴィッツではなかったか。一族の絶滅への、政治的・実際的実行ではなかったか。

また、ロランは言っている。

「デモクラシーのもとでは、他の場合（前近代的な封建制・君主制など——筆者）より、もっと危険な共通の敵——『凡庸』に対して決して武装を解いてはならぬ。このことを思い起こさせるのは歴史家の義務である」（『今日の音楽家』一陽来復、一九〇八）

歴史はジグザグの過程ですすむ。ヘーゲルは正反合の弁証法で示し、ロランの場合では理解の仕方がつぎのようになるべられる。

「わたしは音楽家ですから、まず全体の調子^{トコロ}を味わい、それから複雑なハーモニーの諸要素を分析するのですが、ハーモニーの混濁を感じることから始めて、ハーモニーを理解するにいたります。ひとたび分析がなされるや、わたしはハーモニーにまたその意味を、あるいは少なくとも、それとの接触でわたしに委ねられた意味を付与しつつ、ハーモニーを再構成します。」（ピエール・アブラハムあての手紙、一九三〇・一・二二）

調和 *unité, harmonie* に達するための、これらの「苦しみごと」「曲り角」（アンネット）「不協和音」（ロラン）「悪の陳腐さ」（アーレント、「スペシャリスト」）「文明化された野蠻」（ブルクハルト）「混濁」（ロラン）エトセトラ……。

これらは転軸器であり、ポイントである。マイナスをプラスに転換するチャンスである。現代の現象として、われわれの日常を圍繞するニュース・情報などの渦中にふりまわされている自己自身の問題として。

今これを考えるのは個人のアンネットではなく、「地球が一つのものとなった現在の人類」の全体でなければなら

ぬ。われわれは、曲り角にいるのである。人類社会の全体が存在理由を問われている。

*

つぎに、そのためにきわめて有益と思われるアランのことをばを補足しておきたいと思う。

「精神は放棄したときしか、おのれにおいて死ぬことはない。すべてに立ち向かうことこそ、精神の機能そのものである。……つぎの瞬間、まったく新しい、この大きな宇宙によって真白に洗いなおされた瞬間を信じること、これがつねに生きてゆくということだ。……最後の瞬間は、最大数と同じように、考えることが不合理なものである……」

(アラン『海辺の対話』一九三二)(『ロマン・ロラン全集』三九卷「カイエ・R・R 挨拶と友情 一九六九」一四五頁)

*

「ミケランジェロの書簡、これはどの部分においても、美とか作品の製作とか、一言にしていえば、その思想内容が問題となっているのではなくて、いたるところ、注文とか報酬とか、大理石塊の運搬、ときには破損とかが重要視されているのだった。そして石の割れ目がいつも新たな製作の着想をもたらすのだ」(アランの要約「ラベルズ亭の尽餐」一九三八・九)

二〇〇〇年三月

(元編集者)

魂の対話——ロマン・ロランの実験的精神

濱田 陽

一 時間の三重奏——『魅せられたる魂』

「母と子 第二部」を読む——

外国文学を翻訳で読む場合、少なくとも四つの重層的時間を意識できる。すなわち、作中時間、原作者の執筆時間、翻訳者の翻訳時間、そして、それを読む私たち自身の生きる時間である。このうち、まず、前者三つの時間について考えたい。

ロマン・ロランが作中で設定した「母と子 第二部」の時間は、一九一五年十月初旬から一六年十月。このとき、主要登場人物アンネット (Annette) とシルヴィ (Sylvie) 姉妹はおよそ三十五歳から四十歳、アンネットの息子マルク (Marc) は十五歳前後である。第一部

から第五部にエピローグを加えた「母と子」全体は、第一次世界大戦の勃発から終戦まで（すなわち一九一四年七月から一八年十一月）が舞台となっているので、大戦前半期に位置づけられる一年である。

では、ロランがこの「第二部」を執筆した時期はいつだったのだろうか。

「母と子」については、一九二五年十月二十四日から二六年五月二十日というロラン自身の記録がある。「魅せられたる魂」執筆が一九二二年六月から三三年九月までと十二年にわたっていることを思えば、「母と子」は全作品の中でも七ヶ月くらい間に集中的に執筆されたことがわかる。そして、おそらく「第二部」は、一九二五年の終わり、もしくは一九二六年のはじめ頃に書かれたのだろう。

これはロラン（当時六十歳）が、インドで進行しつつある世界的な事件と一層深い交流に入りはじめた時期である。インド洋艦隊を指揮するイギリス提督の娘マドレーヌ・スレイド（同約三十歳）をガンディー（同五十七歳）に紹介し、「母と子」執筆の筆が軌道に乗りはじめた一九二五年十二月の日記には、「私の妹にあてた彼女の手紙は、将来宗教史のおどろくべき文献をなすであろう。マハトマと彼女との対話、彼女が崇敬の念をもってそれを聞き、こころにとめる有様は、一つの新福音書を思わしめる。明らかにガンヂーは慈愛と神聖さにおいてキリストに劣るものではない」とある。

「母と子」というタイトルからもわかる（明らかにそれは聖母マリアと幼子キリストのイメージを想起させる）ように、少なくともここでのロランには、同時代のキリスト教が救えない社会的現実を救済しうる犠牲的存在を、自身の属する最良の精神伝統が涵養してきたメタファーによってつかみとろうとする苦闘がみられる。第一次大戦が突きつけたいくつもの未解決の難問を、実験的に解き明さねばならないという切迫した想いが、胸中にある。

たにちがいない。そして、彼は創作においても生活においても、自らの精神を実験台に献じていくのである。

なお、興味深い符合であるが、ロランが「母と子」を脱稿した当日（一九二六年五月二十日）には、ネルー（当時三十六歳）と娘インディラ（同七歳）がスイス、ヴィルヌーブにあるレマン湖畔のロラン宅を訪問している。インディラが後に独立インドの首相として暗殺テロの犠牲となったことは周知の事実である。

では、翻訳者宮本正清の仕事はいつなされたのだろうか。『魅せられたる魂』全巻は、一九三一年から四〇年に翻訳され、岩波文庫から刊行されたのが一九四〇年十月〜四十二年八月である。これは三十四歳から四十三歳にかけての訳業だった。

このことから、次のことがわかる。「母と子」における主人公アンネットの作中想定年齢と訳者の当時の実年齢がほぼ重なっている。そのため、翻訳作業でアンネットとつきあった訳者は、彼女の精神の成長に自らの成長を（あるいは己が理想とする女性像の成長を）重ね合わせるように、原文フランス語に対応する日本語を探し出

し、時には創造して、コンテキストの中に嵌め込んでいったと思われるのである。注目すべきことに、この仕事は、ロランが全作品を完成する前から始められている。宮本は評価が定まった作品ではなく、実験を続けるロランの人間に賭けたのである。その姿勢は、実は、以前から継続されてきたものである。一九二九年に彼はすでにロランから次のような手紙を受け取っている。「あなたの私のためにお持ち下さる愛情に感謝します。その愛情は、あなたがあえて私に示そうとなさらずに、八年ものあいだ、お心に秘めておかれただけに、いっそう私の心をふかく打つのです」。よくいわれるように、この訳業は、世界的恐慌の傷跡から全体主義、太平洋戦争へと至る流れの中でなされたものだ。しかし私は、当時まだ三十代であった新進の仏文学者が、未完状態にある作品に人生の賭けを行ったという事実にも同じだけの関心をほらいたい。

「母と子」。「魅せられたる魂」。原作者六十代。訳者三十代。時代を生きる鼓動が聞こえてこよう。

二 アンネットの爆発

「母と子 第二部」の中で、生活の資を稼がねばならないアンネットは、男子中学校（コレージュ）の教師として、パリを離れ、亡き父の出身地であるフランス中東部ブルゴーニュの古い町に行く。相手にする生徒は十二人〜二十人。コレージュの教室には、皮なめしの臭気がただよってくる。

ところが、「受け容れるのに彼女にとってもっと苦痛だったのは、魂の臭い (l'odeur des âmes) だった。それはもはや情熱のために——闘争、憎悪、苦悩のために熱病にかかった「魂」(l'âme) ではなかった。／彼女はここでは無関心 (l'indifférence) を発見した。」

(宮本正清訳 以下同じく引用する)

中学校は古い町の象徴、生徒たちは大人の反映である。「土地は美味であり、食欲は満たされ、野心は限られている。／古い地方の麻痺したこの平和——ブドウ畑の丘々と野の円に閉じ込められ、フランスの中部にしっかりと楔のように入ったこの地、戦争の大砲がかすかにし

か聞こえてこない／こうした平和は、中学校の教室の匂いがした。「彼らは得々として自分自身の判断（それも雑然たるものだが）を放棄して卸売りの思想に、つまり学校とか、アカデミーとか、教会とか、国家とか、祖国、種族などという大衆の世論に雷同して欣然としている。」

アンネットはここで不安を感じる。田舎町の住民は本性によって存在するが、彼女は自分自身を見い出せない。パリを離れ、側に息子マルクがいなくてもあいまって、欠乏感をもちつづける。息子は、夜ごとパリの全寮制中学校を脱走し、軍需工場で働くアナーキスト少年、家出した少女、陶器職人の労働運動家等と知り合い、退学処分を受けて、ちょうど大戦で夫を失ったばかりのシルヴィに引取られる。この間、マルクとの間には、終始ぎこちないやり取りだけがなされる。（実は、マルクは徐々にアンネットを発見する過程にあり、「母と子」の終盤で両者の精神が向き合うことになるのであるが。）

「彼女の場所はもうなかった。息子の心の中にもなく、世界の中にもない。／しかも、彼女は欲していた。／精

力は彼女には満ちていた。／この力、この活動慾、この戦闘慾、この愛したい欲求／人々の愛するものを愛するののか？ 否／彼らが憎むものを憎むのか？ 断じて／古い町に赴任してちょうど一年が過ぎている。ある十月の雨の夕暮れ、休暇先のパリから戻ったアンネットは停車場から押し出されたドイツ人捕虜の群れに出会う。彼女はすでに、一年前の赴任の日、列車で一つの駅を通る際に、ドイツ兵捕虜が工作場の囲いに閉じ込められ、町の住民が見物に殺到する様を目撃していた。

「行列の出現が、遠方から、怒号によって告げられた。／護衛は不十分だ。群衆は、拳固を振りあげ、女どもは爪を磨ぎすまして、彼らに向かってどっと殺到した／彼らは虐殺されるのだとおもった。石が投げられた。群衆は杖や傘をふりかざした。殺つつける／という叫び声、口笛。いちばんよく狙われたのは、もちろん、例の士官だった。拳固で突き飛ばされた、一人の手が伸びて彼の軍帽をひたたくて投げすてた。一人の女は咆え立てながら彼の顔に唾をひっかけた。男は、撲られて、よろめいた……」

ここで、ドイツ兵捕虜たちを見た一年前の出来事、田舎町の住民と生徒への違和感、マルクへの母性愛の葛藤と渴きが、深層心理における爆発の動機となった。

「アンネットは跳り出た……彼女はそこにいたのだった。群集の三列のうしろに。彼女は驚愕し、眺めていたのだった。彼女は何も予想してはいなかった、どうする気もなかった。自分の心中に何が起りつつあるかを弁別する余裕さえなかった……彼女は頭を下げて彼女の前に大通りを塞いでいる、憤激した人々の中に突入し、押しつけて、自分で通路をつくった。人々はリヴィエールという女の腕の力を知らされた。また、彼女の咆える声も／「卑怯者、それでもあなた方はフランス人ですか？ (Etes-vous des Français?)」の二声の叫びは鞭を二度揮ったほどの効果をあらわした。彼女は続け、一息にいった。「あなた方は人間ですか？ (Etes-vous des hommes?)」負傷者はみんな神聖です。苦しみ悩むものは皆兄弟です。」彼女は声と腕とで群集を制えつけた。彼女の眸の凄さに、人々は顔を反けた。」

住民たちの迫害にさらされるドイツ兵を、彼女は我を

わすれて弁護し、一行とともに病院に着く。そこで、あの負傷した青年を介護し、その死を看取る。

その時、フランス人のアンネットは、死に逝く若者に、彼の母国の言葉、ドイツ語で語りかけることによって、民族や国家とちがった魂の場所にふれる。アンネットは魂の中に隠されていた「母性」と向き合うのである。

三 母性の出現

「彼女は、彼の耳に、憐れみに充ちたドイツ語の言葉を囁いた。／「息子や、あたしの坊や、あたしの可哀そうな、いとしい坊や…… (Söhnchen! Knäbelin! Mein armer lieber Kleiner! / 仏訳 Mon fili Mon petit garçon! Mon pauvre pauvre cher petit!)」／彼女は彼を抱きしめた。彼女は彼が解放され逝ってしまったのを見届けるまでは、断末魔の指から自分の手を離さなかつた。」

「彼女は帰途についた。もう夜の三時だった。凍った霧。消えた空。空虚な街。部屋には火の気もない。彼女

は床にも入らなかつた、朝まで。世界の怖ろしさが彼女の中にあつた。彼女の心は苦惱でいっぱいだった。——しかも、彼女の心は軽くなつていった。それは人類の悲劇の中にその持場をふたたび見つけたのだった。」

「彼女の上のしかかつて一切が落ちた。肩をぐつと振って、彼女はそれを払いのけた。それを自分の足元に見て、今さらのように、自分を庄しつぶしていた重量をさとした……／彼女は、宿命的な戦争と祖国を受動的に認容していた。／否認されていた、猿轡を嵌められていた自分自身の性質、裏切られていた、満たされないでいた彼女の性質が、野蛮な自然に対抗して、突如として立ち上つた。」

アンネットは内心の声を発する。あるいは、内心の声を聴く。

「彼女は自分の権利を、自分の掟を、自分の悦びを——また自分の苦しみも、しかし彼女自身の苦しみ——母性を要求する。

すべての母性を。単に息子に対する母性ではない……

お前らはみんなわたしの息子です。幸福な息子たち、不幸な息子たち、お前らは互いに身を裂き合っています。けれどわたしはお前らをみんな抱きしめます。お前らの最初の眠り、お前らの最後の眠りを、わたしは自分の腕の中で揺すります。眠りなさい。わたしは世界の「母」です……」

これは、「母と子 第二部」のクライマックスのバラグラフであり、新たな訳を試みる。

原文では、母性も「母」も大文字で表現される。それは、権利、ルール、歓喜、苦惱の一切を所有する存在としてたちあらわれる。マルクやドイツの少年兵だけが彼女の息子ではない。ロランの文章は、そのような母性と母を直視しながら、子供たちを抱く全なる母の腕の動きのように、リズムをもって揺れている。

「Elle réclame son droit, sa loi, sa joie, — et sa souffrance aussi, mais sa souffrance sienne — la Maternité.

Route la Maternité. Pas seulement celle du fils!...

Vous êtes tous mes fils. Fils heureux, malheureux, vous vous déchirez. Mais je vous étreins tous. Votre premier sommeil, votre dernier sommeil, je le berce en mes bras. Dormez! Je suis la Mère universelle...

「彼女は彼女の権利、ルール、歓喜を求める。そして苦悩を。だが彼女自身の苦悩をも。——母性だ。

すべての母性。単にその息子のものではない!……あなた達はみな、わたしの息子達。幸せな、不幸な息子達。あなた達はあなた達をひき裂く。でもわたしはあなた達をみんな抱きしめるの。あなた達のはじめの眠り、あなた達のさいごの眠り、わたしはそれを両腕の中で揺するのよ。眠りなさい! わたしは全世界の母なのです……」

(試訳)

四 積極的平和

こうして、「母と子 第二部」のしめくりでアンネツトが見出したのは、何だったのか。

「昼がきたときに、彼女はもう一人の母——彼女が最期

の眼を閉じてやった死者の母親に手紙を書いた。／それから、彼女は教科書とノートブックを再び取りあげた。そして休みもせずに再び勤労の一日の生活をはじめた——新しい力をもって、そして心の中に平和をもって。」

「母と子」冒頭に掲げられたスピノザの言葉、

「何となれば、平和とは戦いの無きことならず。それは魂の力より生まるる美徳なればなり」

(Car la paix n'est point l'absence de guerre. C'est la vertu qui naît de la vigueur de l'ame.)

これを、スピノザ『政治論』第五章四部のコンテキストに入れて読みなおしてみると、次のようになる。

「その国民が恐怖に脅かされて武器をとらない国家は、平和状態にあるというより、戦争のない状態にあるとむしろ言われるべきである。というのも、平和は戦争の欠性にはあらずして、精神の強さから生ずる徳であるからである。……他にも、国民がただ隷従することしか知らず、あたかも家畜のように導かれ、平和がそうした無気力に拠っている国家は、国家と称されるよりも、荒野と称されて然るべきである。」(河井徳治訳)

つまり、アンネットが見出したのは、ロラン自らがスビノザから学び、血肉とした積極的平和の精神である。

五 アンネットの分身

ここに、部分的にアンネットを体現していたと思われる傑出した女性の、第一次大戦の生きた証言を二つだけ挙げておきたい。

ヘレン・ケラー 一八八〇年生まれ 当時三十六歳

「世界大戦が始まってからというものは、前のように講演旅行をしてまわることもできなくなりました。／私はそれまでについぞ感じたこともないほどの精神的寂ばくさを味わっていたのであります。／愛国心に名をかりた憎悪の一塊がしだいにふくれあがり、大きくなり、驚くべき野蛮性を具えてゆくありさまを日々読みながら、なおかつ、自分の信仰をもちつづけてゆくということは、非常に困難なことであります。／それで一九一六年の夏、私たちは軍備反対の講演旅行をして歩きました。／

私が自分の仕事を、社会事業と盲人事業とに限っている間は、それこそ新聞はこぞって、わたしのことを／「現代の奇跡」だのといつてほめそやすのであります。ところが、いったん私の話が現代の社会問題または政治問題に触れると／あたかも私が不穏分子のかいらいででもあるかのように書きたてるのです。幸か不幸か私はいつも自分の心に思っていることをそのまま発表するように生まれついでるので、当時自分の胸を強く打って鬱積している思想にはけ口を与えずにはおられなかつたのであります。／私だって自分自身の精神というものをもつた一個の女性であるということ認めてさえもらえれば、どんな苛酷な批評でも甘んじて受けるつもりでおります。」
〔わたしの生涯〕

モンゴメリ 一八七四年生まれ 当時三十九歳 一九一四年十月十六日付友人宛書簡

「前回手紙を差し上げてから、百年が過ぎたような気がします。／八月十三日、わが家に息子が生まれました——死産でした。／なんだか心の一部がこわれてしまっ

たような気がします。何もかも変わってしまったように思われるのです。きっと、今度の恐ろしい戦争がおどろおどろしい影を投げかけていることもあって、こんな気持ちになっていいのかもかもしれません。／あたかも雷雲か何かのように、あつという間に戦争が世界中を覆ってしまいかと思われました。何が起こったのか気づかないうちに、ヨーロッパが端から端まで炎に包まれてしまったのです。／わたしがこの話を、気持ちは良いものの鈍感な田舎の人たちにしますと、無知と想像力の欠如がいっしょになって戦争というものを実感できずにいるらしいその人たちは／声をあげて笑うのです。／現在、『アン』シリーズの新作に取りかかっています／この作品が面白くてたまらないと思つたことは一度もありません。／今となっては、さまざまに国民が死闘に明け暮れているというのに、落ち着き払って腰をおろし、女生徒たちのために、女生徒たちのささいなふるまいについて書くなんで、ほとんど不可能と思われれます。』（『書簡』）

これらを合わせ読めば、アンネットというロランの創

造したモデルが、きわめて稀でありながらも、すでに実在の同時代的身を有していたことが、観て取れる。しかし、このモデルそのものは、ロランという語り手によって、しばしば実在の人物以上に、未知の読者の精神的クローンニングに効果を發揮した。

六 私たちの魂の実験

冒頭で、外国文学の作品を読む場合、四つの重層的時間を意識することができると述べた。終わりに、四つ目の時間、作品を読む私たち自身の生きる時間について述べてみたい。

スイスのヴィルヌーブの自宅で、ベッドに横たわり“L'Âme enchantée”を執筆するロランの姿、『魅せられたる魂』の訳業を進めたアンネットと歳近き学者の姿が心に浮かぶ。躍動するロランの原文、苦闘する訳者の祈りの込められた日本語。そこからは自由が放射している。では、私たちは、これをどう受け取ればいいのか。

第一次大戦、第二次大戦、冷戦と時代は烈しく流転し

てきた。そして、冷戦後の紛争、インド・パキスタンの核実験、NATOによるユーゴ空爆、国内における精神の閉塞状況。これらを考えるための急拵えの道具立ては、すぐさまロランⅡ『魅せられたる魂』に、見つからなくて当然であろう。しかし、幾つかのありうべき思想や生き方の、震撼すべき実験を、それは見せてくれる。私たちが学べるとしたら、ロランの実験的精神そのものであり、魂の対話である。

現在も、歴史は動き、私たちの魂も、動いている。この曖昧さ、躊躇の奥に、私たちは私たちの位置を観、吟味しなければならぬだろう。「小説の死」が語られて久しい現在、人々は、それぞれ自身の魂の登場人物、主人公となり、生き、試すことができるのである。それは、私たちにとって、私たちの時間、今である。(了)

(京都大学人間・環境学研究科博士課程)

*本稿は、ロマン・ロラン研究所に於いて一九九九年五月二十二日に行われた第一九七回読書会例会での発表にもとづく。



ロマン・ロラン研究所と自然破壊

一昨年から、研究所北側に隣接する通称半鐘山、東山三十六峰のひとつ北白川山に連なっている小高い丘が開発業者によって崩されようとしております。地域住民とともに開発阻止の運動をし、昨年三月には京都市議会へ「緑の保全」請願を五四二四筆の署名を集めて提出しました。請願は通例、採択も不採択もされないのですが、全党派一致で採択されました。しかし、法的効力がないため、業者はあくまでも開発姿勢を強固に押し進めております。

この二年間、市長へ手紙を書き、副市長に地域住民とともに要望に行き、市会議員の方々に訴え、署名を集め役所へ何十回と足を運びました。当局は住民合意を業者に指導しますが、私有財産優先で法律の壁にぶつかればかりです。運動は法律を超えたところがあるので諦めないつもりですが、今後、施行されると当研究所の

書庫や居宅が民法で決められた八十センチ隣接地と離す規則によって、業者はそこで巨大なし字型の擁壁をコンクリートで固めて造成していくのだそうです。シヨベルカーやブルドーザーなどで木々を伐採し岩山を崩すため昭和初期の木造家屋が持ちこたえられるかどうか、その震動と騒音たるや言語に絶するものとなりましょう。環境の問題もさることながら現実的な問題が派生することへの配慮が欠如しているのが現状です。

これまでの経過を会員の皆さまにも知っていただきたく関係資料の一部を掲載させていただきます。

(宮本エイ子)

こんなエゴイズムが闊歩するのを、指をくわえて見守る弱き市民に、市長さんはどんな眼差しを送って下さるのでしょいか。

都市防災では阪神大震災が大きな教訓になっています。かの場所も、銀閣寺と吉田山を通る花折断層の真ん中に位置するのが無気味です。

さらに、文化芸術都市を目指す市長さん、芸術、文化を創るのは規則や法律によってではないことはいうまでもないでしょう。人の心を打つのは、それを超えたところの極限を表現しているからではないでしょうか。

最近、銀閣寺がユネスコの世界文化遺産に登録されました。銀閣寺を訪れる人は、銀閣寺道というバス停で降ります。ここから「世界文化遺産」の雰囲気を見学客は求めるのです。もし、ここで、問題の開発のシミュレーションをすれば、三十坪位の家々が六階建てくらいの高さのなかで、段々に藪いて建てられ、洗濯物がたなびく風景が視野に入ってくるのです。内外からよく耳にする言葉、「京都の神社・仏閣そのものの風情は素晴らしいが、周辺の無秩序にはがっかり」というものです。

この問題の山林も、元はといえば銀閣寺領でした。その銀閣寺よりさらに古くから、この地の氏神として嶺峰続きに鎮座する北白川天神さん、その宮司さんが次のようにおっしゃっています。「この辺りは聖地と聞いている。その小山は、大正時代まで、村々が一望できる地の利を得て半鐘台が置かれ、その名を取って半鐘山と呼んでいましたんや。聖山を崩すなんて……もつてのほか！」

この言葉を聞いて、先祖に貢献した恩ある場所を、受け継ぐ私たちは見放すことができるでしょうか。東山連峰の市街区域に突き出た白川砂で有名な白川に沿った緑の最後の珠玉の一滴を、不況という名のもとに建築業界の餌食にされることは、耐え難いことです。

都会の騒音にあって一隅を照らす古都ならではの、まさしく〈歴史的風土保存区域〉〈風致地区〉なのです。京都に坪庭という発想がありますが、この山は都市の坪庭です。京都の良さは、思い掛けないところで緑木立に遭遇してほっとするといわれます。小東京は要りません。他では味わえない奥床しい古都の香りが求められています。

わたしたち日本人、特に京都は山に囲まれた地であり
ます。この景色が美しい京都を物語ってきたのは明々白白
であります。この京都の特長を、市長さんはさすがにこ
れまでも重視され、「京都の街を囲む山麓は守る。そし
て住民の意見を尊重する」との心強いご発言に救われて
おります。

高齢小字化を迎える二十一世紀、山を崩してまでの住
宅は悪害にして一利もありません。時代はオゾン減少、
地球環境の悪化が訴えられております。

芸術・文化・歴史・国際都市という名の京都が、今こ
そ試されているのです。常識と良識が通る、人間と自然
が調和し、京都に住んでいて良かったと誇りに思える都
市、法律の規則を超えた高い政治的市長さんの「北白川
山保全」ご英断に希望が託されるのでございます。

一九九八年四月二十二日付

宮本エイ子 他

市長からの回答

拝復 風薫るさわやかな季節となりました。

お手紙ありがとうございました。お寄せいただきましたま
たお便りにつきましてお返事いたします。

ご指摘の件につきましては、現在、開発者から一戸建
での分譲住宅の建築を目的とした開発行為を行いたいと
の事前相談を受けているところであります。当該地は、
都市計画法による市街化区域内となっております。開発計画
が法令上の基準を満たす場合には、法的には許可をしな
ければならないこととされています。したがいまして、
開発者が自主的に開発を断念しない限り、市が強制的に
これを禁止することはできません。

しかしながら、本市といたしましても、周辺住民の皆
さんの反対を押し切り、開発行為がいわば強行されるこ
とが望ましいあり方であると考えているわけではありま
せんので、周辺住民の皆さんと十分に話し合いを行い、皆
さんのご要望をお聞きするよう開発者に指導してまいり

ます。

また、本件につきましては、市会への請願も行われておりますので、市民の皆さんの代表としての議会の意思を最大限尊重してまいりたいと考えております。

なお、同封されていた宮本様の手紙に賛同する方々にもよろしくお伝えください。

以上の内容については、都市建設局土木部開発指導課（☎二三二一三五五八）が窓口となっております。

今後とも、市民の皆さんが暮しよいまち京都となるよう努めてまいりますのでよろしくお願いいたします。

敬具

平成十年五月十八日

京都市長 梶本 頼兼

宮本エイ子様

請願書

銀閣寺前町と小山町に隣接する通称「半鐘山」の緑の保全に関する請願

請願主旨

地球環境の悪化が深刻化し、異常気象やオゾン減少で、自然環境保護が訴えられております昨今、左京区銀閣寺前町四一―一番地の山林が、有限会社エステート・オーミ&株式会社幸田工務店によって、山林の伐採と宅地造成計画が住民に告げられました。私たち住民は、自然破壊と宅地開発の惨状をこれまでに数々見てきました。実行されてからでは遅いのです。

〈風致地区（第二種）〉で〈歴史的風土保存地区〉の保存すべき緑豊かな山林を、切り崩される前に、保全して下さるよう全力を尽くしていただきたく切に願う次第であります。

請願理由

開発は木々の伐採と、古代からの地形の変更によって、雨水の氾濫、鉄砲水、土砂崩れの危険が心配です。法的に許される宅造規制法の開発であるにせよ、未曾有の災害をもたらした阪神・淡路大震災の教訓が京都の都市計画に活かされるべきです。問題の山林は吉田山と銀閣寺を通過する花折断層のあいだに位置する危険地帯でもあります。土砂や水の流れは専門家やコンピュータでも予測不可能であります。かかる危険は、業者でなく、地域住民が負わされるのです。生命の危機にさらされる周辺住民の意志を尊重されたく願うのは身勝手でしょうか。半鐘山は、その名のごとく、昔から大正時代まで、半鐘台が置かれ地域住民に貢献した歴史的台地であり、美しい日本の景色をなしてきた東山三十六峰のひとつです。「精霊送り火」で有名な大文字の如意ガ岳、世界文化遺産に登録された銀閣寺、日本百選の道に選ばれた「哲学の道」のいずれにもつながる借景でもあります。洛東の景観と文化が醸し出されるきわめて重要な場所であることはいまでもありません。

古代から日本人の精神的土壌を形成した清明で神聖な山の存在は、私たち近隣住民にとっては心の原風景です。さらに内外から訪れる観光客にとっても、深遠な緑林がもたらす魂の安らぎは、現代人が求める究極の癒しとなるでしょう。私たちが住民は、一人の人間として自然との調和を願い、〈緑の保全〉に万策を講じて下さることをお願いいたします。

平成十年五月十一日

京都市会議長 中野 竜三様



ロマン・ロラン研究所の活動

- | | | |
|--------------|--------------------------------|-------------------|
| 1971. 5. 15 | ロマン・ロランと日本の青年（映画『ロマン・ロラン』上映） | 宮本 正清 |
| 1971. 11. 27 | 苦悩のなかのインド | 森本 達雄 |
| 1972. 6. 24 | ロマン・ロランとフランス革命 | 波多野茂弥 |
| 1973. 5. 26 | ロマネスク美術 ブルゴーニュ地方の教会を中心に | 高井 博子 |
| 1973. 12. 18 | 私の人間観 | 末川 博 |
| 1974. 6. 29 | 私の通った芝居の道 | 毛利 菊枝 |
| 1974. 12. 5 | ロマン・ロラン没後30周年記念——講演と音楽の夕べ | 佐々木斐夫
演奏：玉城 嘉子 |
| 1976. 7. 11 | ロマン・ロランとゲーテ
ユダヤ民族と西洋文明 | 南大路振一
岡本 清一 |
| 1977. 2. 10 | 中国文学とロマン・ロラン | 相浦 泉 |
| 1989. 4. 20 | ロマン・ロランの反戦思想と現代 | 加藤 周一 |
| 1989. 6. 9 | ロマン・ロラン全集と私 | 小尾 俊人 |
| 1989. 9. 29 | ロマン・ロランの革命劇から——フランス革命200周年の記念に | 中川 久定 |
| 1989. 11. 17 | ロマン・ロランとの出会いから | 尾埜 善司・今江 祥智 |
| 1990. 1. 27 | ロマン・ロランに負うもの——平和と音楽 | 新村 猛 |
| 1990. 6. 2 | ロマン・ロランとガンディー | 森本 達雄 |
| 1990. 9. 26 | 『魅せられたる魂』と私 | 樋口 茂子 |
| 1990. 10. 26 | 占領時代における日本社会とロマン・ロラン | 小尾 俊人 |
| 1990. 11. 30 | ロラン・片山・ヘッセ | 宇佐見英治 |
| 1991. 3. 1 | ロマン・ロランと私 | 松居 直 |
| 1991. 6. 4 | ロマン・ロランとベートーヴェン | 青木やよひ |
| 1991. 9. 27 | ロマン・ロランとデュアメル | 村上 光彦 |
| 1991. 10. 25 | ロマン・ロランの思想の二面性 | 兵藤正之助 |
| 1991. 11. 29 | 初めにロマン・ロランあり | 岡田 節人 |
| 1992. 1. 29 | 自伝的諸作品について | 佐々木斐夫 |
| 1991. 6. 26 | 〈大洋感情〉と宗教の発端 | 岩田 慶治 |

1991. 9. 25 ロマン・ロランとイタリア 戸口 幸策
1991. 10. 30 ロマン・ロランの革命劇をめぐって 鶴見 俊輔
1991. 11. 27 宮本正清 没後10年記念追悼会 ピアノ演奏：山田 忍
 静かにやさしき顔 佐々木斐夫
 不思議な静けさ ― 宮本正清の世界 小尾 俊人
1993. 1. 29 ロマン・ロランの演劇的世界 石田 和男
1993. 5. 24 ガンディーとロマン・ロラン 山折 哲雄
1993. 6. 23 『魅せられたる魂』を語る (前) 重本恵津子
1993. 10. 15 『魅せられたる魂』を語る (後) 重本恵津子
1994. 1. 28 いま、ロマン・ロランを語る 尾埜 善司・今江 祥智
1994. 9. 9 ロマン・ロランと音楽 中野 雄
1994. 10. 14 神秘と政治 ロマン・ロラン、その思索と行動のあいだ B. デュシャトレ
 ロランとフランス革命 河野 健二
 自然科学とゲーテ 岡田 節人
1994. 12. 3 ロマン・ロランとドイツ音楽 岡田 暁生
 ― ベートーヴェン、デュカ他作品 ピアノ演奏：小坂 圭太
1994. 12. 24 おはなし「ビエールとリュス」と「また逢う日まで」 今江 祥智
 映画上映「また逢う日まで」(監督 今井 正)
1995. 1. 27 ロマン・ロランと日本人たち 小尾 俊人
1995. 6. 2 私の歩んだフランス文学の道 片岡 美智
1995. 11. 10 ロマン・ロランとR. シュトラウスの周辺 岡田 暁生
1996. 6. 14 ロマン・ロランとの出会いから 鄭 承姫
1996. 11. 16 レクチャーコンサート 岡田 暁生
 ベートーヴェン：ピアノソナタ 第21番、28番
 ピアノ演奏：北住 淳
1996. 11. 18 「戦間期のリベラル」経済学から見たロマン・ロラン 本山 美彦
1997. 1. 17 「主体的精神と普遍的人間愛」ロマン・ロランと魯迅 區 建英
1997. 6. 6 わが青春と一生 岩淵龍太郎
1997. 9. 19 ロマン・ロランと結核の時代 福田 真人

1997. 10. 4	ピアノとチェロのための夕べ ロマン・ロラン記念コンサート	ピアノ演奏：北住 淳 チェロ演奏：小川剛一郎
1998. 6. 8	ロマン・ロランと種蒔く人	柏倉 康夫
1998. 9. 25	ロマン・ロランと政治的魔術からの解放	柳父 困近
1998. 10. 30	ロマン・ロラン記念コンサート	ピアノ演奏：小坂 圭太 レクチャー：岡田 暁生
1998. 11. 25	ロマン・ロランと大佛次郎	村上 光彦
1999. 6. 11	ロランと音楽	岡田 暁生
1999. 10. 8	日本ロマン・ロランの友の会50年記念コンサート 園田高弘ベートーヴェンを弾く お話と演奏「ピアノとベートーヴェン」	園田 高弘
1999. 12. 1	ロマン・ロランとインドの精神	森本 達雄

月例会の《読書会》は203回（日本ロマン・ロラン友の会時代から数えると378回を迎えます。

1998年度から要望により『魅せられたる魂』を読んでおります。参加者各々自分と重ねて議論百出、活発に進行しています。



財団法人ロマン・ロラン研究所設立趣意書

設立者・初代理事長 宮本 正清

ロマン・ロラン（一八六六—一九四四）は、日本人にもっとも強く深い、精神的、道徳的影響を与えたヨーロッパの芸術家の一人であります。武者小路実篤、志賀直哉等の白樺派の人々をはじめ、高村光太郎、尾崎喜八、大仏次郎、小島政二郎その他の作家、音楽家、画家、彫刻家、さらに科学者、実業各方面にいたるまで、その青春時代をロマン・ロランの思想、芸術の光に照らされ、人格的感化陶冶を受けた者は枚挙にいとまないのであります。

しかし、ロマン・ロランの真の偉大さと、存在価値は、たんに文学的分野にとどまるのではなく、むしろその博大な人間愛にあります。人種、文化、文明等のあらゆる国境を越えて、真に世界的、人類的である彼の愛の精神は、「ジャン・クリストフ」「魅せられたる魂」その他の小説、戯曲、伝記、文学的、音楽的、歴史的研究のみならず、現代社会のあらゆる不正と戦うために、人権と自由を擁護するために、多くの政治的、社会的論争を生涯つづけました。さらに、ロランは、東洋と西洋、ヨーロッパとアジアとの相互理解、信頼、尊敬と両者の協力が、人類の進歩と平和のために、いかに必要であるかを説き、われわれの文明を墮落と頹廃から救いうる唯一の道は、アジアとヨーロッパが、あたかも車の両輪のように支持し合い、各人種、各国民がユニークな文明、固有の伝統を尊重、保存して、人類全体の偉大な共有財産として、現存のそれに勝る大文明を創造すべきだと言っております。ロランは、インドの哲学、宗教を研

究した数巻にわたる著述の中で東洋の精神のもっとも深遠で高邁なものは、西洋のそれと本質的に異なるものでないばかりか、両者がほとんど完全に一致していることを実証しております。このような思想家、芸術家、偉大な人間が、わが日本において、半世紀以上にわたって、変ることなく、今もなお、青年層に親しまれ、愛読され、尊敬されていることは、日本のために喜ぶべきことと信ずるのであります。

一九七〇年十二月

◆現在の主な三つの活動

ロマン・ロランセミナー

公開講座

●講演会

●読書会・研究会

◆ロマン・ロラン研究所賛助会員について

●ロマン・ロランの著作に感動、また

●彼の周辺の芸術家たちに興味、

●あるいは、ロマン・ロラン研究所活動に共感

いずれの理由でも結構です。皆様のご賛同をお待ちいたしております。

●特典①機関誌「ユニテ」の配布。②賛助会員の参考に資する情報、資料等の提供。③公開講座無料。

●会員①一般賛助会員は年会費一口五千元。特別賛助会員は年会費十口以上。

新会員からのお便り I

私がこのホームページをつうじてロマン・ロラン研究所を知ったのは、ひと月ほど前、インターネットを利用して始めてまだ間もないころのことでした。

十七歳の秋に私は初めてロマン・ロランの作品（ジャン・クリストフ）にめぐり逢いました。その時から二十八年の月日が流れましたが、その間、ロランがクリストフを担い、クリストフに担われて生きたように、私もまたロランに想いを馳せない日はありませんでした。

しかし不幸にも、ロランへの想いを分かち合える人と相知ることはなく、おそらく一生ロランについて語り合える人に出会うことはあるまいと、いつしか信じねばなりませんでした。ロランとの“出会い”が内面の生（真実）に関わる出来事であった以上、それはある意味で当然のことであったのかもしれない。それがために「孤独」であらざるをえず、結局は孤独であることが「人間存在」自体の根本的な条件であると今ではある種の諦念

とともに理解するようになりました。しかし少なくとも、この世に生まれ生きるということが無意味ではないと信じ続けることができたのは、ロランの言葉とベートーヴェンの音楽がいつも自分の傍らにあったからでした。

そして今、長い時間ののちに、時を越えてここにロランの精神が生き、ロランを心の糧として生きている人たちの集うところ——「ロマン・ロラン研究所」によるやくだどり着くことができたのです。

苦しかった二十代の「孤独」の底で私を支えてくれたのは、ロランを通じて知った「生の道づれたち」の存在でした。宮本正清さんもその一人でした。その宮本正清さんの眼差しの下に誕生した、京都銀閣寺畔のロマン・ロラン研究所。私にとって今、ロマン・ロラン研究所は、ロランの生きた息吹きに触れるために、そして宮本先生ご自身の生涯を知るために、いつの日か訪れることを夢見ずに入られない“巡礼の地”のように感じられます。

私は一会社員に過ぎませんが、ロマン・ロラン研究所の会員（もしくは賛助会員）に加えていただくことができるならこれ以上うれしいことはありません。もしもこ

の希望が叶うようでしたら、手続きの方法、会費など下記宛てにお知らせいただければ幸いです。

篠原 英昭

新会員からのお便り Ⅱ

五年程前、偶然にロランの世界を知り、ただ読書することによってのみですが、彼に非常に影響を受けました。時には、自分の周囲に現実には生きていない人々のだけよりも彼を身近に感じ、彼の魂の偉大さに打たれるばかりでした。

しかし彼の死後五十年を経て、彼は時代の中で忘れ去られているようでした。彼の時代と何の接点もない時代に生まれた自分がこれほど打たれた思想が、なぜ忘れられているのか、大変不思議です。……ある時、貴研究所のホームページを見つけたわけです。……ロランが想像もしなかったであろう、こうした文明の機器に感謝します。

自分自身の生き方や内面はロランの名を口にするものばかりられるほど程遠いものですが、彼の思想、言葉が放つ光、高さ、清浄さは、私が生きていく上で決して手放したくない心の柱、山の頂上なのです。

彼の言葉のひとつひとつを国境と言葉、文化の違いの壁を完全に取り去り、同じ人間として完全な共感のもとに日本人に届けられた片山先生や宮本先生のお仕事は本当に立派で、心から感謝せずにはいられません。……

訳者の方々、そして読者さえも、彼（ロラン）の思想を理解し共感する人は皆、彼という発光体を中心に自らも輝き出す、そのように感じます。彼と同じ時代を生きただ人も、そして五十年後の今も。死後も彼の魂は生きているのだと、はっきりと感じます。自分がその証拠だからです。彼は子供を残しませんでした……いいえ、何千人かわからぬ子供を産んだのです。自分もその一人だと思えます。不思議なことです。

田間 千晶（二十代の会社員）

一九九九年 贊助會員、寄付者名簿

(アルファベット順・敬称略) *特別會員

有馬通志子 蘆田ひろみ 浅井 幸 芦田 友秀
 安部 道子 浅野 幸作 シッシユ・D・由紀子
 出口 治男 濱田 陽 福田 真人 福井 友栄
 福田万紗子 福岡 美彦 古家 和雄 *本郷美智子
 林 次郎 日野二三代 樋口 茂子 北条 文子
 石原 和子 *稲畑産業株式会社(稲畑 勝雄)
 井土 熊野 井土 真杉 伊砂 利彦 乾 昌明
 岩坪嘉能子 片岡 美智 梶本 智美 加藤 澄子
 河合 一穂 狩野 直禎 清原 章夫 喜多 寿子
 北垣みどり 河田 厚公 岸田綱太郎 熊木 秀雄
 小牧 久時 近藤 正雄 栗林 弘
 *みすず書房(加藤 敬事) 松居 直 宮内 幸子
 村山香代子 前田 和子 前田 政昭 本野 妙子
 森内富美子 森本 達雄 宮本エイ子 森久 光雄
 村上 光彦 松井 菊恵 成田 雅美 西村七兵衛
 西村喜代子 西原久美子 永田 和子 能田由紀子

西成 勝好 野村 庄吾 鍋谷 郁二 中山 冲彦
 野口 榮子 乗金 芳子 小尾 俊人 小田 秀子
 折田 忠温 大出 學 落合 孝幸 大川起示子
 岡部 素行 奥 和義 尾埜 善司 大谷 史朗
 大谷 暢順 大谷 綾乃 大谷佳世子 小川 京子
 李 珣淑 李 修京 佐々木斐夫 篠原 英昭
 *三友居(山本 勝) 坂谷 千歳 佐藤ミサエ
 佐久間由紀子 佐久間啓子 島谷 亜希
 志賀 鍊三 下郡 将宏 下郡 由 杉本千代子
 鈴木 文代 新宮惠美子 田中阿里子 田代 輝子
 多田 淳子 富田 武 竹本 浩典 竹下美砂登
 谷口けいこ 長 美穂 徳永 勲保 馬木 紘子
 梅原 ふさ 氏家 玲子 安田 俱子 山下 雅子
 吉原 圭子 山本 信子 八木美佐子 山下 真子
 ヴァンチュール・ミシエール

友の会創立五十周年記念

コンサートへのお礼

—あとがきにかえて

記念コンサートのお礼が憚りながらいきなりトイレ談義になります……。

「こんな大勢の人見たことないな、小ホールはじまって以来とちがうか、今日は……」演奏合間の休憩、関西弁丸出しの音大生らしい若い女性の化粧室で聞いた会話である。おかげさまで京都コンサートホール（小）は超満員であった。一週間前、百枚預けたチケットが百枚全部戻ってきた苦い思いが嘘のよう。演奏会前日のプレスの威力に瞠目する。委託した音楽事務所の電話は鳴りっぱなし、お断りするのに一苦労したらしい。「チケットはこれからもう絶対売らんといってくださいね」と、招待券をお送りしている方々への配慮もあり、座席カウンターに事務所長の神経がびりびり注がれていることが電話の向こうから伝わってきた。「当日券なし」の立て看板を三つ、京都コンサートホール入り口に掲げた。五百十席、

プラス十三の立ち席が認められている。立ち席使用は気分が悪くなったお年寄りの事例があるので極力避けたいらしい。「当日券なし」の看板を見ても、どうしても聴きたい人は必ずいるらしく、その人たちが結局六人いた。こうして園田高弘氏の「お話し」と「演奏会」が始まった。アンコールはナシと決まっていたが、拍手は鳴りやまない。演奏者の魂の高揚で奏でるベートーヴェンとロランのユニテの精神が集まった人々をひとつにさせる感動的なコンサートとなった。「日本ロマン・ロランの友の会」発会式で演奏下さったデビュー早々の二十歳の園田氏が日本最年長となり、いまや世界的ピアニストとなって創立五十年を記念していただけたことが大きな成果であった。神秘の糸の結集ともいふべき珠玉の時を刻む。

「ベートーヴェンと園田先生お二人の偉大さにただただ感激いたしました。生活の問題を忘れ、魂が浄化されるひとときでした……」「バルコニー席からよく見えたんだけど、ピアニストの手がまるで蝶々のように鍵盤を舞うのよね、神業としか思えない、凄かったわ……」「私たちと同年輩の方なのにあんな力強いエネルギー

な演奏が出来るなんて、年老いたなんていっていられない！ 元気が出た！ 生きる力が湧いた！」と、etc。
多くのお電話、fax、お便りをいただいた。演奏会翌朝一番には、「朝早くごめんね、お疲れかもしれないけど、でも早くお礼を言いたかったの、夕べの園田さんの演奏よかった！ これまでベートーヴェンを聴いてきたけれど、実は主人が一番好きだったのはベートーヴェンだったんだけど、園田さんの演奏で主人のその心がやっとわかった思い！ ホロピッツのCDも聴いたけれど、たしかにいい、しかし生の園田さんの演奏は心を聴いた。至福の時というのかしら……、あなたがロマン・ロラン研究所を続けられている意味も納得した……」その主人というのは、ノーベル化学賞の故福井謙一先生である。

五十年前から、またこれからロマン・ロランのヒューマンスピリッツを尊び、人生を愉しみ、音楽を愛する皆様方のご賛同にあらためて感謝申し上げますとともに、この企画を推進下さったみずす書房元役員の故高橋正衛氏と小尾俊人氏に厚く御礼申し上げます。

なお当日の園田先生のお話は再録し、本号の巻頭を飾らせていただきました。また当日の新聞記事として各紙の報道がありました。そのうち京都新聞のものを研究所活動に転載いたしました。

本号には森本、村上、小尾、濱田氏から玉稿をいただき本誌が充実したものになり、厚くお礼申し上げます。

なお、唐突ながら本研究所をめぐる自然環境問題を関係の皆さまにも知っておいていただきたいページを割きましたことをご理解下さい。

新しくインターネットなどを通じて、本研究所に寄せられたメッセージを掲載いたしました。今後とも、いろいろな方々の寄稿を載せていきたいと思っています。ご協力よろしく願います。ありがとうございます。
(宮本エイ子)

「ユニテ」編集部 小尾俊人

野村庄吾

西村七兵衛

宮本エイ子

ユニテ 第二十七号

発行日 二〇〇〇年四月二十日

発行者 (財) ロマン・ロラン研究所

理事長 尾 埜 善 司

京都市左京区銀閣寺前町三二

電話・FAX

(〇七五) 七七一―三二八一

郵便番号 六〇六一八四〇七

郵便振替振込口座番号

〇一〇五〇―九一五九九九六

印刷所 (株) 北斗プリント社